

F D ・ S D 活 動 報 告 書

平成 30 年度

羽 陽 学 園 短 期 大 学

平成 30 年度 F D ・ S D 活動報告書

目次

平成 30 年度	羽陽学園短期大学の F D 関連事業について	1
平成 30 年度	学内 F D ・ S D 推進事業計画	2
平成 30 年度	F D 懇談会記録	5
平成 30 年度	学内 S D ・ F D ワークショップ	17
平成 30 年度	学内公開授業・授業検討会	19
平成 30 年度	第 10 回 大学間連携 S D 研修会	23
平成 30 年度	第 71 回保育学会	25
平成 30 年度	第 24 回 F D フォーラム	30
平成 30 年度	教員個人目標に対する自己評価	46
平成 30 年度	卒業時満足度調査	60
平成 30 年度	学習成果アンケート (1 年次・2 年次・専攻科)	62
平成 30 年度	授業改善アンケート (前・後期)	68

平成 30 年度の羽陽学園短期大学の FD・SD 関連事業について

FD・SD 推進委員会委員長 柏倉 弘和

本委員会は、昨年度から名称を FD・SD 推進委員会と改めて 2 年目であるが、教員のみに関わる内容だけでなく、職員を対象とした内容も企画し、短大全体の質の向上に繋がる取り組みを目指した。

定例 FD・SD 懇談会では、学生を交えての懇談を今年度も 4 回行った。実習の振り返りや実習報告会を充実させる方法についての意見交換などを通して、学生の率直な考えを聞くことができた。今後もできる限り実際的なテーマを設定して継続することで、本学の教育、運営についての改善策が見つかるのではないだろうか。

本年度の学内 FD・SD ワークショップは、テーマを「シラバスの作成について」とした。シラバスの記載方法が大幅な変更となったためであり、項目ごとに記入内容を確認し、学内でフォーマットが統一できるようにした。

公開授業については、前期に公開授業週間を設け、後期に特定の教員の公開授業と授業検討会を設けた。専任教員はすべての教員が参加しているが、非常勤講師の先生方が参加できる取り組みにすることが今後の課題である。

学生 FD については、日程の都合がつかず、学生が他大学の学生と交流する機会が作れなかったことが残念である。来年度以降は、可能な限り学生が外部に出て活動できる機会を提供していきたい。

今後、短大の運営が難しくなっていく中で、より一層、教職員間の連携、情報共有が欠かせなくなる。FD・SD 活動を充実させることは、困難な道のりの道標となるのではないかと考えている。

平成 30 年度 学内FD・SD推進委員会事業計画

◇FD事業内容

(1)定例FD・SD懇談会

前年度に引き続き、【別記】の月間目標や懇談会テーマについて各自の取り組みを検証し、意見交換を行う。学生FD推進のため、定例FD・SD懇談会への学生の参加については継続していく。昼食会形式は継続し、金額を抑え、各教員の負担を少なくする。学生分は学校が負担する。

新たに事務職員目線の懇談会テーマを設定し、教職員がお互いの業務を共有できる場にする。
ゲストを招く。

(2)公開授業—授業検討会

公開授業週間については、前期に特定の教員の公開授業、後期に公開授業週間を設ける。

特定の教員の公開授業については、授業検討会とセットで進める。

今年度も引き続き、非常勤講師の先生方にも参加を呼び掛ける。

(3)FD個人目標—自己評価

前年度の自己評価を踏まえ、各教員が年度当初に具体的な目標を掲げ、年度末にその自己評価を行う。

目標と自己評価は掲示とFD報告書へ記載し、公表する。

(4)授業評価

すべての授業で行う。専任、非常勤ともに“つばさ”フォーマットの授業評価アンケートを用いる。足りない部分は各教員でオプションの設問を利用する。

授業評価の結果をどのように活用するかが課題として挙げられている。

(5)卒業時満足度調査

今年度も実施する。教授会で報告し担当部署には学生の不満を検討してもらう。

(6)FD・SD活動報告書の作成

内容を精査の上、記載事項の取捨選択を行い、紙面のさらなる充実を図る。

(7)学外企画への参加依頼/相談

学外のFD・SD企画、研修などには可能な限り意欲的に参加し、情報収集に努める。教職員の大学運営への参加意識を高める。

(8)FDネットワーク“つばさ”との連絡

早めにスケジュールを確認し、参加者を募りたい。

学生が参加できる事業については、早期に呼びかけ学生の興味を喚起したい。他大学の学生との交流を通して、広い価値観を持った学生を育成する。

(9)新規事業の企画案・学内ワークショップの企画案

・教員懇談会、学内ワークショップで「授業評価、学習成果等アンケートの結果」をテーマにする。

・教員懇談会、学内ワークショップへの学生参加。

・FD・SDの取り組みに詳しい講師を招聘する。

・ループリックについて、勉強会を実施する。

・基礎教養入門、新入生支援講座、ゼミ活動、カリキュラム、カリキュラムマップ・ツリーについての見直す機会を作る。

・土日祝日授業を一般開放する。高校生に開放する。(ウィークエンド キャンパス ビジット)

・幼稚園教育要領の改訂について、勉強会をする。

・AED講習会を行う。

(10) 学生FDについて

教員懇談会等への参加を含め、学生とともに羽陽短大の教育を作りあげていく意識を浸透させる。
学外FDワークショップなどに参加できた学生がいれば、他学生に経験を伝えられる場を設けたい。

平成30年度 FD・SDの基本目標、月間目標、懇談会計画

○FD・SDの基本目標

FD・SDは学生の学びの質向上を目的とし、以下の基本目標を達成するために教職協働で取り組む。

「学生の学ぶ意欲を駆り立てるような働きかけを行う」

「学生が自らの行動について振り返り、自ら成長できるように働きかける」

「学習に適した授業環境づくりに努める」

○FD・SD月間目標と定例FD・SD懇談会（原則、教授会開催日の12時15分～）進行分担

月間目標や懇談会テーマについて、自らの教育活動や職務を振り返り、それぞれの教職員が対等な立場で意見交換を行う。また学生の現状、学習状況などについて、情報交換できる機会にする。

（各グループにおける話し合いの結果発表は12時45～50分を目処に始める。）

- 4月 目 標：「教職員側から積極的に学生と挨拶を交わす」「各教員の年間FD教育目標を設定し、公表する」
テーマ：「平成30年度FD・SD事業計画、定例FD・SD懇談会テーマについて」4/26（木）
司会：樋口 記録：白崎
- 5月 目 標：「学生の活動に積極的に関わり、名前と呼べる新入生を増やす」
テーマ：「カリキュラム、クラス編成、授業時間割について」5/31（木）司会：松田知 記録：樋口
- 6月 目 標：「実習体験について学生と話をし、学生の振り返りを支援しよう」
テーマ：「ゼミでの実習振り返りについて」6/28（木）（学友会参加）司会：太田 記録：大関
- 7月 目 標：「学生が適切な身なりの認識をもつことができるような働きかけを行う」
テーマ：「校内美化について」7/26（木）（学友会参加）司会：小林 記録：宮地
- 9月 目 標：「年間目標の中間評価と修正を行い、課題を明らかにしよう」
テーマ：「学生の学修成果の評価方法について・授業評価について考える」9/27（木）（一年生参加）
司会：柏倉 記録：太田
- 10月 目 標：「学生とのコミュニケーションで分別ある使い分けができるような支援を行う」
テーマ：「学生募集、羽陽短大の広報について」10/25（木）司会：松田水 記録：伊藤
- 11月 目 標：「学習環境を整えるために何ができるかを考えよう」
テーマ：「実習報告会を充実させる方法について」11/29（木）（専攻科参加）
司会：高橋 記録：大木
- 12月 目 標：「ゼミの活動を振り返ろう」
テーマ：「ゼミ、卒業研究で育てる能力について」12/20（木）司会：白崎 記録：柏倉
- 1月 目 標：「2年間、あるいは1年間の学生の成果を見つけて、褒めよう」
テーマ：「業務の効率を上げる方法を考える」1/31（木）司会：荒木 記録：松田知
- 2月 目 標：「今年度の自らの教育活動を振り返り、課題を見つける」
「来年度に向けた明確な教育活動の展望を立てる」
テーマ：「シラバスの作成方法について一課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法―」
「FD・SD年間目標の反省」2/28（木）司会：花田 記録：高桑

※ 弁当注文は懇談会の記録担当が行う。前回の懇談会終了後から、集約も含めて早目に行ってください。

弁当代は注文された方からの実費徴収です。

※ 欠席される場合は早めに記録担当へご連絡ください。

※ FD懇談会に参加できず、司会、記録が担当できない場合は、他の月と交換してください。

4月 定例FD・SD懇談会記録

日時：平成30年4月26日（木）

場所：本学会議室

出席者：渡邊、大木、荒木、柏倉、高橋寛、高桑、松田知、小林、松田水、太田、花田、大関、樋口、
宮地、伊藤、白崎、浦山、片平、本間

司会：樋口 記録：白崎

月目標：教員側から積極的に学生と挨拶を交わす

各教員の年間FD教育目標を設定し、公開する。

テーマ：平成30年度FD・SD事業計画、定例FD・SD懇談会テーマについて

懇談会内容

<グループ1>（渡邊、松田知、高桑、花田）

- ・事業計画について話し合いが行われた。学内ワークショップのテーマとして、ハラスメントや、入試（特にAO入試について）、カリキュラム、クラス編成について取り上げるのが良いのではないかと。
- ・教職協働は出来ていると思うので、そのことを取り上げてはどうか。

<グループ2>（柏倉、大木、小林、伊藤、本間）

- ・これまでのこの懇談会で話し合った内容を実現させていく試みが必要である。
- ・学生募集について取り上げる。
- ・学内美化について取り上げる。

<グループ3>（太田、松田水、宮地、白崎、浦山）

- ・学内ワークショップの企画としてAEDの講習をしてみてもどうか。
- ・教職員のメンタルについて外部講師を呼んでみるのもいいのではないかと。

<グループ4>（高橋寛、荒木、大関、樋口、片平）

- ・FD・SD懇談会の趣旨を明確にする必要があるのではないかと。
- ・懇談会の内容について、授業環境の改善、本学の方向性などを話題に取り上げてはどうか。

<まとめ>

- ・毎回FD・SD懇談会で話し合われている内容が少しでも改善できるように具体的に行動をしていく必要があると感じた。また、今年度は新しくAO入試も始まるため、そのことについて年間を通してテーマにするなどの工夫があると、今後の本学の方向性などを話し合えるいい機会なのではないかと感じる。

ひと月に一回の短い時間での懇談会だが、今年度も有意義なものにしていきたいと思う。

5月 定例FD・SD懇談会記録

日時：平成30年5月31日（木）

場所：本学会議室

出席者：渡邊、大木、荒木、柏倉、高橋寛、高桑、松田知、小林、松田水、太田、花田、大関、樋口、
宮地、白崎、今野、石井、諸橋 欠席：伊藤

司会：樋口 記録：白崎

月目標：学生の活動に積極的に関わり、名前で呼べる新入生を増やす。

カリキュラム、クラス編成、授業時間割について。

テーマ：平成30年度FD・SD事業計画、定例FD・SD懇談会テーマについて

懇談会内容

<グループ1>（大木、柏倉、松田水、花田、石井）

- ・3クラスへの変更が話題となった。1クラス当たり30人を超えると、担任の負担を増加するのでその対応をどうしていくか考えなければならない。
- ・基礎教養入門を新入生支援講座の中で行うなど、授業科目の整理が必要である。再課程認定がカリキュラムを見直すきっかけになるとよい。

<グループ2>（高橋寛、太田、高桑、大関）

- ・3クラスに変更し、担任を外れ、教員に動ける期間ができることは研究や授業改善の面でよい効果があるのではないか。
- ・再課程認定を見越したカリキュラムの改善が必要である。
- ・学生にどういった能力を身につけさせるのか、どういった能力を育てるのか、出口を考えながらカリキュラムへ落とし込んでいく必要がある。

<グループ3>（渡邊、樋口、白崎、諸橋）

- ・3クラス編成にすることで、現在3グループに分かれて行っている授業との組み合わせがかみ合い、時間割として効率がよくなる。
- ・1クラス当たりの人数が増えるとピアノやパソコンの授業で設備面で対応が可能かどうかは検討しなければならない。
- ・ゼミ活動を機能させる。3クラスにすることでできる余裕をゼミ活動の強化に回す。クラス担任の業務（進路指導、就職アフターケアなど）をゼミ担当教員へ分配し、クラス担任の負担を軽減する。ゼミによるより少数の個別対応が大学の押しになるとよいのではないかと。
- ・ゼミ活動を積極的に地域活動へつなげ、大学広報にもなるとよいのではないかと。

<グループ4>（荒木、松田知、小林、宮地、今野）

- ・科目の見直しは必要である。その際、授業の内容も精査し、カリキュラムをデザインする必要がある。
- ・3クラス編成にした場合、非常勤の先生の授業コマ数が減ってしまうことに対する対応を考えなければならない。

<まとめ>

再課程認定に合わせ、3クラス編成を視野に入れたカリキュラムをデザインをしていく必要がある。大学全体でどのような学生を育てていくかを明確にし、それぞれの授業の位置づけが教員へもわかりやすいものになるとよいと考える。3クラス編成での時間割のシミュレーションを行い、現行のものと比較する機会も作っていきたい。

6月 FD・SD懇談会記録

日時：平成30年6月28日（木） 12:15～12:55

場所：会議室

出席者：渡邊、大木、荒木、柏倉、高桑、小林、松田知、太田、松田水、花田、大関、樋口、宮地、伊藤、奥山、塚原、高橋明（出張等による欠席：高橋寛、白崎）

学友会（伊藤遙、大津菜緒、後藤早紀、吉見健）

司会：太田 記録：松田知

月目標：「実習体験について学生と話をし、学生の振り返りを支援しよう」

テーマ：「ゼミでの実習振り返りについて」

懇談会内容

<グループ1>（柏倉、太田、宮地、奥山、大津）

- ・ゼミは、少人数のために一人一人の話を聞くことができ、いろいろな振り返りができる。
- ・少人数のために、実習の具体的な様子が話しやすく、いろいろな振り返りができる。

<グループ2>（渡邊、高桑、大関、伊藤、吉見）

- ・少人数のために、本音で話すことができる。
- ・ゼミでの実習の振り返りと友人同士での振り返りとの違いを、明確にすることが課題である。

<グループ3>（荒木、小林、松田水、塚原、伊藤）

- ・明るい楽しい雰囲気ですべて自由に話すことができるために、実習の事後指導と違った視点から振り返りと反省ができる。

<グループ4>（大木、花田、樋口、松田知、高橋明、後藤）

- ・ゼミごとに振り返りの内容や方法に違いがあった。授業でも振り返りをやっているが、振り返りの視点をどのように絞るか、振り返りを身近なことから絞るかなど方法はいろいろあると考えられる。個人的（発表者）には、視点を絞るための資料を配布したが学生の読み込み不足が課題であった。

<学生の感想>

- ・普段話す機会の少ない先生と話すことができた。
- ・今回参加して、改めて振り返りことができた。
- ・先生方の指導の意図がわかり、その苦勞が分かった。
- ・事後指導とゼミでの振り返りでの視点の違いが分かった。

<まとめ>

- ・普段のゼミ活動は、ゼミごとにテーマを決めて実施しているが、今回のように、テーマを決めて少人数を活かす学生指導を検討してはどうか。

7月 FD・SD懇談会記録

日時：平成30年 7月26日（木） 12：15～12：55

場所：会議室

出席者：渡邊、大木、荒木、柏倉、高橋寛、高桑、小林、松田知、松田水、太田、花田、大関、樋口、
宮地、伊藤、原田、片平、吉田、学友会4名（出張等による欠席：白崎）

司会：小林 記録：宮地

月目標：学生が適切な身なりの認識をもつことができるような働きかけを行う

懇談会内容 テーマ「校内美化について」

<グループA>（学長、松田水、高桑、吉田、学友会学生1名）

内履き、外履きの使い分けを行うように外履きのままでは汚れがひどくなるため、学生一人ひとりに認識してもらうように働きかける。教室の机の中のごみは入れたことを忘れてしまい、そのままになることがあるため、授業前後に教員が声かけをすることが有効ではないかということが挙げられた。

<グループB>（柏倉、荒木、大木、樋口、片平、学友会学生1名）

身なりについては、TPOに応じた身なりができるようになることを社会人となる前にしっかり身につけてほしい。

職員の方が一生懸命取り組んでくれているおかげで、校内がきれいになっている。しかし、特に女子トイレの汚れが目立つため、使用の学生自身が汚さない意識を持つことも大切である。その対策として、マニュアルを作成することやチェックリストを作成することも良いのではないかという意見があった。

<グループC>（太田、高橋寛、花田、伊藤、原田、学友会学生1名）

当たり前のことではあるが、自分のごみは自分で片づけることを授業毎に呼び掛けていくことが良いのではないか。教員ばかりではなく、学生同士で注意できる環境を作り、きれいな状態を保つことが大切ではないか。

身なりについては、暑い時期であり露出が目立つ学生もいるため、TPOをわきまえた身なりであってほしい。また、寮にエアコンがなく、熱中症予防をして体調管理をしてほしいという意見もあった。

<グループD>（松田知、小林、大関、宮地、学友会学生1名）

廊下がきれいになっている印象を受ける。よって、きれいな状態を保つために、防げる汚れは意識していくべきである。例えば机の中の私物や忘れ物、配布したプリント、プリントの余り等がいつも教室にあるのを目にする。そこで、教員側が配布時に余ったプリントは返却してほしいことを伝え、回収することでも余計なゴミにならずに済むことがあるのではないかという意見がでた。

<まとめ>

学友会4名から、教員だけでなく、学生自身も清潔保持や整理整頓について発信していくことが大事であるという意見があった。今回の話し合いをきっかけに校内美化について一人ひとりが意識していきたい。

9月 FD・SD懇談会記録

日時：平成30年 9月27日（木） 12：15～12：55

場所：会議室

出席者：渡邊、大木、荒木、柏倉、高橋寛、松田知、小林、松田水、花田、大関、樋口、宮地、伊藤、白崎、太田、浦山、諸橋、本間、1年次学生4名（加藤紗耶香、久保田萌、色摩優華、高嶋瑞紀）

（出張等による欠席：高桑）

司会：柏倉 記録：太田

月目標：年間目標の中間評価と修正を行い、課題を明らかにしよう

懇談会テーマ：学生の学修成果の評価方法について・授業評価について考える

懇談会内容

学生は、配布された前期試験の成績を懇談会資料としながら参加した。参加学生が1年次学生ということから、今回は、アセスメント・ポリシーにおける科目レベルの学修成果の評価方法を主なテーマとした。

<グループA>（松田知、花田、大関、浦山、本間、1年次学生4名・加藤）

・学生による授業評価については、評価用紙の書式に改善の余地があるのではないかと。例えば、評価項目が多いことによる学生の負担感の大きさが改善点として挙げられる。現在は、表面に選択肢のある質問項目が多数あり、裏面に、各授業の良かった点や改善点等についての自由記述式質問項目が複数掲載されているが、裏面の自由記述の質問だけにする等の変更も考えられる。また、授業で不適切と思われる点がある場合には、教員に直接申し出るという方法も導入し得るのではないかと。そのようなことが、教員側で授業改善について考慮する機会となることが期待されるのではないだろうか。

<グループB>（柏倉、小林、樋口、宮地、1年次学生・高嶋）

・配付された成績は、学生から、試験に対する準備状況、自身の手応え等に対して妥当なものだと捉えられていた。ただ、学修成果の評価の仕方について、例えば、意欲を評価するという場合に具体的にどのような観点で意欲を評価しているのかという点等については、学生の理解に不十分な面があるようである。授業開始時に、学生に分かりやすく伝えることが求められると思う。

<グループC>（松田水、伊藤、太田、諸橋、1年次学生・久保田）

・自分が勉強した分だけ成績にしっかり反映されている、予め示された評価方法に則り到達目標の達成度が評価されている、と学生には受けとめられていた。ただし、科目の中には、学生の視点から、取り上げられた授業内容が全て重要であることは承知の上ではあるが、その中でも特に重要な点は何かという焦点が絞りにくいとを感じる科目もあるようである。そのために学修への取り組みへの集中度が十分に高まらないことも生じるため、到達目標の達成を学生によりもたらすことができるような教授内容、方法を検討していくことが必要だと考えられる。学習成果の評価方法の示し方については、今後も明確に行うことが求められる。

<グループD>（渡邊、大木、荒木、高橋寛、白崎、1年次学生・色摩）

・予め示された評価方法による到達目標の達成度の評価、自分の学修状況等の面から、確認した成績は

妥当なものだと学生に捉えられていた。実技系の教員としては、実技に対する努力面をしっかり評価したい。適正な評価について今後も重ねて検討したい。教員が以前勤務していた大学の中には、示された成績について学生が異議を申し出ることのできる期間が設けられている大学もあった。その時の経験からも、成績基準を明確に説明できることは必要不可欠なことであると思う。

<まとめ>

- 学修成果の評価は、学生に対する評価のみならず、その評価を通して、取り上げる授業内容、授業の進め方、評価方法等を含む、教員の教育活動を自ら評価することでもあることを念頭に置きながら、学修成果の評価に関して、評価方法、到達目標の更なる明確化、それらについての学生への明快な伝達が求められる。



10月 FD・SD懇談会記録

日時：平成30年 10月25日（木） 12：15～12：55

場所：会議室

出席者：渡邊、太田、大木、荒木、柏倉、松田知、小林、松田水、花田、大関、樋口、宮地、白崎、伊藤、今野、奥山、石井

（欠席：高橋寛）

司会：松田(水) 記録：伊藤

月目標：学生とのコミュニケーションで分別ある使い分けができるような支援を行う
懇談会テーマ：学生募集、羽陽短大の広報について

懇談会内容

<グループA>（渡邊、花田、大関、樋口、今野）

- ・マスコットキャラの活用
- ・学生の満足度を高める
- ・外部に学生の姿がどううつっているか
- ・本学を進学先に選択した、しない理由の分析
- ・どのような学生を育てたいか

<グループB>（太田、柏倉、松田知、石井）

- ・何が広報に効果的か
- ・卒業生の声に説得力がある
- ・看板設置(電車の中、天童駅、天童市内)
- ・経費とのかね合い

<グループC>（大木、荒木、小林、宮地）

- ・特効薬、効果的に行うのが難しい
- ・現在実施しているものを検討し、質を高める
- ・学生の声に影響が大きいので、良い発信ができるよう学生を育てる

<グループD>（高桑、松田水、白崎、伊藤、奥山）

- ・荒砥高校の場合、町報にて広報している。本学でも、天童高校、創学館等と合同で、市報にて広報してはどうか。
- ・高校訪問の時期が10月では遅い高校もあり、訪問時期も難しいところがある
- ・学生の声が影響大により、学生を活用する

<まとめ>

- ・効果的な宣伝が重要である。
- ・学生を使つての宣伝が必要である。

11月 定例FD・SD懇談会記録

日時：平成30年11月29日（木）

場所：本学会議室

出席者：渡邊、大木、荒木、柏倉、高桑、松田知、小林、松田水、太田、花田、大関、樋口、宮地、伊藤、白崎、原田、高橋明・塚原・専攻科：有路・戸津・飯坂・荒木（欠席：、高橋寛）

司会：白崎 記録：大木

月目標：学習環境を整えるために何ができるか考えよう

テーマ：実習報告会を充実させる方法について考える

懇談会内容

<グループ1>（太田・小林・宮地・原田・有路（専攻科）

- ・事前に、学生への実習報告会の目的や具体的な内容等の情報を伝えてあると、学生も目的を持って参加できるのではないかな。
- ・発表内容については実際の事前準備の内容や、実習の具体的な内容を伝えることによって、聞く学生自身の事前準備に活かせるように、分かりやすい情報提供の在り方を工夫する必要がある。

<グループ2>（荒木・高桑・大関・高橋明・戸津（専攻科）

- ・発表者側への対応として、具体的に学んだことを発表できるように、レジメや発表内容についての指導をしていくことが大切である。
- ・聞く側への対応としては、特に2年次については自分の体験と関連づけて聞くような指導が必要。
- ・会の在り方については、分科会の内容を全体で集まって発表する、ローテーションしながら聞く等全体の内容が分かるような工夫も必要なのではないかな。

<グループ3>（渡邊・松田水・花田・白崎・塚原・飯塚（専攻科）

- ・参加者にとっては参考になる内容となっている。
- ・分科会の人数も多い、少ないがあり、学生のモチベーションにもばらつきが見られる。
- ・2年生からの意見を引き出す工夫が必要である。（専攻科では一人一人から聞き、指導してる。）

<グループ4>（大木・柏倉・松田知・樋口・伊藤・荒木里（専攻科）

- ・1年次対象の報告会は、実習への不安が和らげられる等、事前の具体的な情報の場として有効である。
- ・全体の報告会については、2年間の実習の総まとめとしての位置づけと捉えると、2年生の参加の姿勢は意欲的とは言えない。2年間の実習の流れをデザインし直してみる必要があるのでは。
- ・発表者を増やしたり、討論する場面を設けるなど、主体的な学びの場となるような工夫が必要である。

<参加学生の感想>

- ・実習報告等も含め様々検討しながら進めていることが分かった。報告会へも積極的に参加したい。

<まとめ>

- ・主体的な学びの機会となるよう、事前の指導や分科会の持ち方については継続して検討し、より充実した実習報告会へ向けて工夫を重ねていく必要がある。

12月 FD・SD 懇談会記録

日時：平成30年12月20日（木） 12:15～12:55

場所：会議室

出席者：渡邊、大木、荒木、柏倉、高橋寛、高桑、小林、松田知、松田水、太田、花田、大関、樋口、宮地、伊藤、白崎、片平、吉田、本間

司会：高橋寛 記録：柏倉

月目標：「ゼミの活動を振り返ろう」

懇談会テーマ：「ゼミ、卒業研究で育てる能力について」

懇談会内容

<グループA>（渡邊、高桑、樋口、白崎、片平）

- ・ゼミ活動のねらいや卒業論文の基準等はゼミごとばらばらではなく、ある程度統一した方がいいのではないだろうか。
- ・1年次からどういう能力を育てるか考え、計画的に進めていくことが望ましいと思う。

<グループB>（大木、太田、松田水、花田、吉田）

- ・プレゼン能力を育てるとか、育てたい能力を考えておくことが望ましいとは思う。
- ・現実的には、期限まで卒論を提出するのさえ難しい学生もいる。そういう学生については、計画的に進める力をまず育てることが必要
- ・ゼミ活動全体を通しては、協調性が育ったりすることはあると思うが、実際には何を育てているか自信を持って言えない状況である。

<グループC>（荒木、高橋寛、松田知、大関、宮地）

- ・女子学生の振る舞い方を育てたりということもある。
- ・卒業研究を通して、授業で学んでいることを総合できればよいのではないか。
- ・11月から論文開始では、時間的に難しい。
- ・ゼミ旅行についても、接遇を学ぶとかふさわしいねらいを設定することはできる。

<グループD>（柏倉、小林、伊藤、本間）

- ・論文でなくレポートでいいのではないか。
- ・プレゼンという形で発表して、他の人が意見を述べるというのが本来のあり方だと思う。
- ・人間関係を気にして、自己主張や他を批評できない学生が多い。
- ・2年間の中で論文を指導するのは難しい。学生にしても書くのは困難である。
- ・教員自身もじっくりと研究に取り組む時間がない。

<まとめ>

- ・現状では、論文指導を本格的に行うのは難しい。
- ・ゼミを通してどういう能力を育てるか、ねらいをしっかりと考えることが必要ではないか。
- ・育てたい、または育つ能力として具体的に挙げられたのは、プレゼン能力、計画性、協調性、女性の振る舞い方、接遇等である。

1月 FD・SD懇談会記録

日時：平成31年 1月31日（木） 12：15～12：55

場所：会議室

出席者：渡邊、大木、荒木、柏倉、高橋寛、高桑、松田知、太田、小林、松田水、花田、樋口、宮地、伊藤、白崎、大関、今野、浦山、諸橋

司会：荒木 記録：大関

月目標：2年間、あるいは1年間の学生の成果を見つけて、褒めよう

懇談会テーマ：業務の効率を上げる方法を考える

懇談会内容

<グループA>（渡邊、柏倉、花田、宮地、今野）

・教員一人当たりの担当科目数が多いという現状がある。時間割の密度も高いので、独自の科目等は減らせないだろうか。

・例年行っている業務がそのまま継続される傾向がある。都度、振り返りをするべきではないだろうか。

<グループB>（大木、高桑、伊藤、白崎、諸橋）

・専任教員・非常勤教員が授業のほとんどを担っているが、その一部でも施設の現職の方にご担当していただくことはできないだろうか。

・学生指導・対応に要する時間が年々増えている。その時間の質・効率をあげることは、他の業務の効率化に繋がるものになるのではないだろうか。

・教職員を増員してほしいという率直な思いもある。

<グループC>（荒木、高橋寛、松田知、樋口、浦山）

・会議一つをとっても、報告事項は事前に確認しておき、協議にできるだけ時間をかけられるようにし、会議全体の時間短縮を図れないだろうか。

・学生の履修登録や教員の出勤簿・出張伺い等の各種書類も現在ペーパーベースで行っているが、効率化できる余地はあるだろう。

・スポーツ祭やクラスアピール等の学校行事の回数を減らすことはできないだろうか。また、行事においては時折、教員が主として運営してしまうきらいがある。この点に関して、学生を「いかに放っておくか」を試行することは効率化と共に、学生の成長に繋がるのではないか。

・仕事があるということは喜ぶべきことであることを忘れてはいけないだろう。

<グループD>（太田、小林、松田水、大関）

・例年行っている業務に加えて、年々、新規の業務も増えているため、その総数は増加の一途をたどっているという現状がある。

・委員会単位では、旧年度の分掌にそのまま人員を割り当てるのではなく、その業務分掌がそもそも必要なのか、コストパフォーマンスはどうか見直しを毎年行うことが必要ではないか。ただの惰性で行っているならば、取りやめる決断も必要だろう。

<まとめ>

・今回のテーマは毎年取り上げているが、教職員間で直接意見しづらい内容もあつてか、中々進捗が

見られないという現状がある。

・効率化に関して、以前、会議においては会議資料の早期配布を行い、教職員は報告事項を事前把握した上で会議に臨むことで、その時間短縮を図ろうという話題があがり、実際に試みられてきているが、数年経つと風化してしまっているという現状がある。会議資料の早期配布は継続して行われているので、それぞれ委員会や会議では委員長はじめ、教職員の自覚が必要ではないか。

・業務が多岐に渡り、また、学生指導や募集において困難を要する時勢になってきたからこそ、自分の仕事だけに固執するのではなく、周りの様子も見ながら、教職員同士の連携を強めていくことが必要ではないだろうか。

2月 定例FD・SD懇談会記録

日時：平成30年2月28日（木）

場所：本学会議室

出席者：渡邊、大木、荒木、柏倉、高橋寛、高桑、松田知、小林、松田水、太田、花田、大関、樋口、
宮地、伊藤、白崎、奥山、石井、塚原

司会：花田 記録：高桑

月目標：今年度の自らの教育活動を振り返り、課題を見つける。

来年度に向けた明確な教育活動の展望を立てる。

テーマ：今年度に懇談会で出されたアイデアを実行するには

FD・SD年間目標の反省

懇談会内容

<グループ1>（渡邊、柏倉、伊藤、白崎、塚原）

- ・校内美化について、何故散らかすのかが話題になった。ゴミ箱がやたら多いことや机に入れるスペースがあるから入れられないように塞ぐということも話題になったが、地道に指導していくしかない。
- ・研究室の書類の処理についてはマメにシュレッダーにかけていくしかない。
- ・卒論の研究収録を何に使って行くか話題になった。次の年度の指導にも使うが、何より、書いた本人たちの成果として残す意味がある。もちろん論文を書くこと自体に意味がある。

<グループ2>（荒木、高橋、小林、松田水、宮地）

- ・毎月ただ問題出したり、話し合ったりするだけでなく、実現に向けた取り組みが大事。今回、テーマがそうした内容になっているのは初めて。次の年にどれかをピックアップして、具体化していかななくてはならない。

<グループ3>（大木、太田、松田知、樋口、石井）

- ・校内美化で清掃を時間割に組んでも上手くいかないことが報告された。
- ・ゼミでの実習の振り返りは全体で設定し、意思統一できれば、出来るのではないか。
- ・FD/SDの目標は年度当初、委員長の樋口先生が原案を作成している。毎回記録(議事録)を残しているので、補助金の対象となるようなテーマについて、設定していくのも良いのではないか。
- ・クラスの3クラス化は、処々の事情があり、実現は難しい。また、2年後期の時間割構成が、他の学期に比べて履修授業数が少なくなりがちなので、充実させたいが、これも難しい。

<グループ4>（高桑、花田、大関、奥山）

- ・「たら、れば」になるが、3クラス編成は、実現できれば、補講の組みやすさなどメリットも出るのではないか。
- ・ゼミでの実習の振り返りは、是非来年度から一斉に行う様にしましょう。
- ・ゼミのみの指導ではなく、HRの時間などにクラス単位の勉強会や書類の書き方の指導はありでないか？
- ・会議での報告時間短縮は一人一人の意識が大切。仕事も昨年度に倣って継続ではなく、ルーティーンワークにならないよう確認と、必要か不必要かの判断を毎年担当が行うべき。
- ・書類の電子化を進め、印刷等の手間暇を削減していくなどの工夫が必要と思われる。

平成 30 年度 SD・FD ワークショップ

「シラバス作成について」

日時：平成 30 年 12 月 20 日（木）16：00～17:00

場所：会議室

司会：白崎

記録：樋口

参加者：渡邊、大木、荒木、柏倉、高桑、松田知、小林、松田水、太田、花田、大関、樋口、伊藤、宮地、白崎、奥山、塚原

1. 学長挨拶

シラバスは、学生が各授業の内容を理解し、具体的なイメージを持てるようにするためのものである。昨今、シラバスに記載する内容の精査が求められている。しかし、形式だけを合わせ、学生が使いづらいシラバスになってしまえば本末転倒である。今回のワークショップを機会にシラバスの形式、内容を確認し、共通認識を持ったうえで、来年度のシラバスを制作していく。

2. 内容

(1) シラバスとは

「各授業科目の詳細な授業計画。一般に、大学の授業名、担当教員名、講義目的、各回ごとの授業内容、成績評価方法・基準、準備学習等についての具体的な指示、教科書・参考文献、履修条件等が記されており、学生が各授業科目の準備学習等を進めるための基本となるもの。また、学生が講義の履修を決める際の資料になるとともに、教員相互の授業内容の調整、学生による授業評価等にも使われる。」（中央教育審議会「学士課程教育の構築に向けて」（答申）2008年12月）

(2) シラバスの記載項目、各記載項目の内容、留意点について

各項目を確認した。特に「授業の概要・方法」の項目についてはグループワーク、ディスカッション、フィールドワークなどを行っている場合は明記することを確認した。また「授業時間外学習」の項目については、予習復習として、具体的な内容と必要な時間を記載する。

(3) シラバス原稿の点検について

提出されたシラバス原稿については、学生委員会のシラバス編集担当教職員が中心となり、第三者点検を行う。欠落や不備がある場合は各教員へ修正をお願いする。

(4) シラバス原稿の作成方法について

シラバス作成要領に則り、作成する。シラバスの作成例に基づき、改めて各項目の記載例を確認した。特に到達目標については、成績評価と関連し、学生が身につけてほしい能力の段階を考慮し設定する。

(5) その他

高等教育無償化対象校の要件、私立大学等経常費補助・一般補助に関する指標におけるシラバスが関係する項目について確認した。

3. まとめ

今回、シラバスの記入方法が大幅に変更された。1コマずつの授業内容や授業外学習について詳細に記載することが確認された。シラバスは学生の授業選択のためだけではなく、短大としての教育の質保証につながる点で重要である。形式だけのシラバスではなく、学生が成長を実感できる授業を行うためのシラバスを目指して、見直しが必要である。



平成 30 年度前期授業検討会 記録

開催日時 平成 30 年 7 月 26 日 16:10～17:00

参加者 大木、荒木、松田知、柏倉（司会）、高橋寛、高桑、小林、
松田水、花田、大関、樋口、宮地、伊藤、白崎、太田(記録)

グループA 「保育内容総論」 花田（授業実施者）、荒木、柏倉、松田水（発表者）

園行事についての授業であった。保育所保育指針について授業実施者（花田先生）からの話があった後、園行事には何があるかについてグループワークをし、ワークシートに記述する、という流れだった。グループワークでは学生の反応が良かった。「保育内容総論」は、花田先生の専門分野ではないということで、不安があったり説得力がないと思っていたりするとのことだが、授業を参観してそのような印象は受けなかった。花田先生が思っておられることには、自分の専門分野と担当授業の内容が一致している訳ではない教員にとって、共感する部分がある。そのような場合でも、大事な考え方などには専門性を超えて通じるものもあるのだから、できることはあるのだと思う。

DVD鑑賞も行ってた。山形では実施されていないような、自然の中の保育についてのDVDだった。DVDの内容について、ワークシートに記述するようにとの指示があった。自分の授業では、これは良い、悪いということは言いたくはない、洗脳したくはない、良いものなのかということについては自分で考えて欲しいという意図でDVDを使用しているとのことである。DVD使用については、意図を持って使用することが大事であると思う。

グループB 「図画工作」 樋口（授業実施者・発表者）、高桑、松田知、小林

メッセージカードを作るというテーマの授業で、「作り込む」授業の後半部分を見ていただいた。授業実施者である自分（樋口先生）では、「教えている」つもりだったが、もっと教えても良かったのではないかとの指摘をいただいた。「伝えるメッセージ」と「伝えるテクニック」とのバランスにおいて、伝えるための手段がどちらにあるのかということとは大きな問題であると感じた。無目的に技術を身につけることは、ひとつの手かと思う。

カリキュラムを考慮する際には、授業の「住み分け」を話し合うことがあった方が良いのではということについても話をした。カリキュラムを作る際に、どのようにデザインしていくかということを考えることは必要なことだと思う。

「楽しむ」ということを子どもにどのように伝えるか、ということについては、うまく伝えられない時もあるので、その点をどうするかということも話題に上った。

遅刻した学生に特に対処しなかったことについて、見ていて気になったとの意見があった。自分には、そのような学生を「放っておく」傾向があるが、遅刻したことについて言及した方が良いのか、構わないままにしておいた方が良いのか、という見極めは必要であると思う。

グループC 「体育」 大木（授業実施者）、大関（発表者）、宮地

参観者の2人は、「体育」の授業のうち、バレーの授業の参観者と、レポート発表の授業の参観者である。

授業実施者の大木先生によると、バレーの授業では、体験を通しての学びを意図し、味わえるものをイメージしながら教材の持つ可能性を感じて欲しいと考えているとのことである。学生間の関わりを意図した対応がなされている点も印象に残った。授業がどこに向かうか分からないという意味で、「拡散型」の授業であった。

レポート発表の授業は、子ども理解から始まり、仮説を立て、検証する、というプロセスのレポートが事前に学生に課されており、それを発表する授業であった。発表用シートと、発表を聞いてまとめるためのシートが使用されており、「集約型」の授業であった。緊張感のある雰囲気があり、参観して勉強になった。同じ科目内で、「拡散型」と「集約型」の授業が行われているということも参考になった。

グループD 「こどもと音楽 B」 白崎（授業実施者）、高橋寛（発表者）、伊藤、太田

ピアノの試験の少し前という時期の授業であった。1人の教員が担当する学生数が4名程度という少人数での授業であるという点が羨ましい、個人練習ができる環境が整っているという点は恵まれている、ピアノへの抵抗感を持たないように配慮しながら授業を行っている、という感想のほか、講義形式の授業を担当している参観者からは、学生の個性や心情を把握できるという点も、少人数授業の利点であるという感想が挙げられた。

授業実施者である白崎先生によると、学生間のピアノの技術の差が大きかったり、進度が進んでいる学生が練習しなかったり、という課題はあるとのことである。また、耳コピーで弾ける能力も大事だが、その能力で演奏していた学生が読譜できていないという現実を突然知ったこともあり、読譜やリズムの取り方をしっかりできるよう指導しながら今後の授業を進めていきたいとのことである。

非常勤講師を含む6名で担当する授業であるため、そのチームワークのありようを検討してはどうかとの指摘があった。指導の基準を同一にすべきではないか、担当する教員が変わる際に、対象となる学生の状況を口述ではなく紙面に記録して引き継いだ方が良いのではないかという意見が出された。



平成 30 年度 後期学内公開授業・授業検討会

記録：柏倉 弘和

1 公開授業の概要

- 日 時：平成 31 年 1 月 23 日（水）3 時限目
- 科 目：保育実習指導 I
- 担 当：大関 嘉成 准教授
- 会 場：8 号室
- 対 象：1 年次後期 必修
- 参観者：本学専任教員

2 授業検討会

- 日 時：平成 31 年 1 月 31 日（木）教授会終了後
- 場 所：会議室
- 参加者：本学専任教員
- 司会者：柏倉 弘和 教授 太田 裕子 教授

(1) グループ討議

○A グループ

メンバー：荒木、太田（進行）、小林、高橋、樋口（記録）

グループ懇談内容

- ・学生は書いてみて初めて気づくことがある。教員が日案について思い出す機会にもなる。非常に感謝している授業である。
- ・フォーマットをほかの教科（美術、音楽、体育など）とつなぐ必要がある。今回の授業をほかの授業で展開するなど、授業間の連携が取れると良い。
- ・「誰がやっても同じように書ける」という目標はどうなんだろうか。一人一人のオリジナリティーをどうとらえるか。
- ・介護の実習では、集団ではなく利用者一人一人に合わせた個別支援計画を立てる。
- ・学生のレベルを考えると、まず各経験、スペースに文字を書くことをこなす課題も、一歩目として必要だろう。
- ・巡回担当で学生を分けて、日案指導を行うのは有効である。個別に対応できると学生から質問も出る。
- ・次の時間に宿題（題材を用意する）をやってきた学生は半分程度であった。
- ・書く時間が学生の能力によって異なる。全体を一気に進めるのではなく、区切りながら進める授業の方法もある。
- ・情報を取捨選択し、記録する能力までつなげていきたい。
- ・介護の記録はパッと見てわかることが重要だが、幼保ではスペースを埋めるように指導される。実習指導者の意識も考慮して、学生指導を行う必要はある。
- ・臨機応変な力を養いたい。

OBグループ

メンバー：大木、柏倉（進行）、花田、宮地、白崎（記録）

グループ懇談内容

- ・日案を書くという作業が苦手な学生が多いと感じるため、書くことに慣れていく必要があると感じる。
- ・書き写す作業を繰り返すことによって、書き方のコツなどを吸収できるのではないかな。
- ・このような書く作業の授業が何回かあっても良いのではないかな。
- ・実習を経験してからの日案指導であるため、一日の流れがイメージしやすいと思う。
- ・日案を書くことが完成ではなく、そこからさらに具体的なイメージを持って準備をすることが必要であることを今の段階から学生に伝える必要があると感じる。
- ・園によっては、幼児の姿を知らずに日案を立てていくと不思議に思われることもあるため、本来の順序に関して、実習前には再度伝える必要があるのではないかな。

OCグループ

メンバー：渡邊、松田(知)（進行）、高桑、松田(水)、大関、伊藤（記録）

- ・日案を書き上げるのが到達目標である。
- ・形から理解する。
- ・フォーマットがあることで、実習指導を誰が実施しても同じように学生が書ける。
- ・書き写しで、応用がきくのか。
- ・援助と留意点については教員の添削が必要である。
- ・集団援助と個人援助では違いがある。
- ・集団援助フォーマットが参考になった。
- ・実習担当で共通認識をもつことができる。
- ・園の一日の流れを理解する。
- ・日案の指導が、園(担当者)によって違いがある。

(2) まとめ

- ・指導案の基本形を書き写すことについては、肯定的評価が多かった。書くことの意義や形から理解することを評価していると思われる。
- ・授業の進め方については、書く時間が学生によって異なることを考慮した方がいいという意見があった。パワーポイントの画面を進めるタイミングについてもう少し配慮した方がよいようである。
- ・実習指導における位置付けについても、概ね肯定的に評価されていた。巡回担当者間で共通認識が持てるという意見が多い。
- ・本時の授業は、あくまで実習指導初期における基本的指導であって、実際の実習では、幼児の実態をしっかり把握した上で、もっと具体的な保育の内容を自分で考えることが必要であるということを、学生に十分に伝えた方が良いという指摘は重要であると思う。たとえば、援助と留意点については、幼児の実態に合わせてもっと具体的に考えなければならない。

第10回 大学間連携SD研修会
「大学改革の時代を突破する職員になる」

報告：大学改革推進センター 吉田 慶太

1. 日時

平成30年9月7日(金)9:30~18:00

2. 会場

山形大学小白川キャンパス 基盤教育1号館

3. 本学参加者

大学改革推進センター 吉田 慶太

4. プログラム

9:30~10:20 開会・オリエンテーション・アイスブレイキング

10:30~12:00 プログラム1

- ・ミニレクチャー「大学教育改革の時代を突破する職員とは？」
- ・グループワーク 「自校の発展の前に大きく立ちはだかっている壁(課題)は何か？」

13:00~16:10 プログラム2

- ・グループワーク 「バーチャル大学の改革実行計画を企画する。」

16:20~17:30 プログラム3

- ・「発表会」
- ・「修了式」

5. 内容

研修会には16名が参加。5~6名ずつ3つの班に分かれ、グループワークを中心に行った。班分けではC班に決まり、東北芸工大、國學院大、沖縄県立芸術大、筑波技術大の4校と同席した。

初めのグループワークでは、自己紹介と自分の大学自慢を1分以内に行うよう指示があり、2~3分の準備時間後に行った。その後のアイスブレイキングでは、10分以内に新聞1部から最も高いタワーを作るというレクリエーションを、班対抗で行った。

プログラム1のミニレクチャーでは、山形大学小田隆治教授より「大学教育改革の時代を突破する職員とは？」というテーマの講義を受けた。日本の人口減少は深刻であることや、中央よりも地方の衰退が激しい傾向にあること。他校との競争意識や危機感を持って行動していかなければ、あっという間に人がいなくなって潰れていくであろうことがどこの大学でも明確になりつつあること。それらの現状を整理し、過酷な生き残り競争を生き抜くために全ての大学職員が「愛校心・使命感・Animal Spirit」を持って行動する必要があるということだった。

愛校心とは「この学校にいる限りにおいては、この学校を良くしたい」という意識であり、使命感とは「自分が変えていかなければならない」という当事者意識や危機感を意味する。そして、Animal Spiritは「意欲・覇気・

血気」を意味し、課題をいかにして打開していくかという考え方である。Animal Spirit は、これからの人間の社会を形成していくうえで、人間が AI に取って代わられないための牙城ともいえる存在である。知識や技術、経験に関しては AI 技術が発達するにつれて、人間に追いつき、抜かしていくことも近々想定される。

しかし、それらを感じ性・直感をもって運用することは、今しばらくは人間の専売特許であり、これからの時代を切り開く鍵となる。短時間ではあったが、重厚な内容の講義だった。

以上の講義をふまえて、自分の大学の「売り」や「課題」を自分なりに整理する時間を 3 分ほど設け、グループ内で各人 3 分以内に発表を行った。各校それぞれに課題があり、中でも共通していたのは「これまで続いてきたことを、ただこれまで通りに続けていくだけではだめだ」という認識だった。その後昼食に入り、午後から仮想の大学の改革を行う劇を、グループで協力して考えることとなった。

自分たちのグループでは、「芸術系の大学のイメージを変え、学生を呼び込む」という内容の劇を行った。現状の整理、改革の必要性の訴え、継続的な改革への取り組みの三点に焦点を当て、これまでには検討しなかった高校への訪問や企業へのアプローチを行うという改革内容を考えた。

6. 参加しての感想

普段使わないような頭の使い方をしたために大分疲弊したが、非常に楽しく取り組みがいのある研修だった。他の大学職員と交流する機会がなかなか得にくい環境にあるので、今後もこういった研修には積極的に参加していきたいと感じた。

研修内容については、これからいかにして生き残り、時代を切り開いていくかを一人一人の職員が持つ重要性を、改めて感じた。

研修の中で印象に残っているのは「ユーモアが大事」ということと、「あなたは仕事を楽しんでますか？」という問いかけだった。自らの仕事を楽しむ工夫や心を自然にもてるよう、意識していきたいと感じた。また、「日常業務ができない者に、企画を任せることはできない」という至極当然の言葉もあり、これからの自分の仕事のやり方について、広い視野を持って取り組んでいきたいと感じた。

I 期 日

平成30年5月12日（土）・13日（日）

II 会 場

宮城学院女子大学

III 本学参加者

教授 大木みどり 講師 樋口健介

学生 岡崎榛華（2-C）高橋真奈美（2-D）

IV 概要報告（シンポジウム、分科会に関しては参加した会のみ記載）

1. 大会基調講演 「学びの物語－ニュージーランドの実践が提起していること－」

○講演者

マーガレット・カー 氏（ワイカト大学 教授）

○司会者 大宮勇雄（仙台大学）

●基調講演

マーガレット氏からは、ニュージーランドにおける以前の幼児教育カリキュラムや現在行われている新しいカリキュラム「テ・ファーリキ」が策定されるにいたった経緯と理論と哲学、及び保育における「物語のよる評価（narrative assessments）」「学びの物語のポートフォリオ」の意味や有用性について具体的な事例を示しながら説明がなされた。

・ニュージーランドで「学びの物語」使われるようになった経緯について

1980年代ニュージーランドでは4つの領域（身体的スキル・知的（認知的）スキル・情緒的スキル・社会的スキル）からなるカリキュラムであった。その後まったく新しいカリキュラム「テ・ファーリキ」（マイル語で「編み上げられたもの」を意味するもので、保育の原理と学びの成果の要素が織物の網目のように入り組んだものであり、学びは人が出会う場で繰り広げられていることを強調するために選ばれた言葉）が策定された。

・「テ・ファーリキ」について

このカリキュラムの特徴は保育の4つの原理と4つの学びの成果を切り離せないものとして結び付けている点にある。4つの原理とは子ども達が有能で自信に満ちた「学び手としての自己」を確立できるよう援助するための4つの道筋を示したものであり、①エンパワーメント（主体性の尊重）②家族や地域（子どもの幸せと成長は家族や地域と共にある）③発達の「全体性」（子供の発達はその子にとって「意味のあることや経験」から生まれてくる）④関係性（さまざまな支援を利用できるように応答的で対等な人間関係が存在する）が示されている。また、発達の課題としての5つの要素（学びの成果の五領域）は①所属②心地よさ③探求④コミュニケーション⑤貢献が挙げられている。これは子ども達が有能で自信に満ちた「学び手としての自己」を確立できるように援助するための道筋を示したものであり、単なる知識や技術ではなく、良い学び手になるための基礎となるもので、長期的な構え(dispositions)や態度(attitudes)を目指すものである。それを評価する方法として物語のよる評価「学びの物語」のポートフォリオがある。

→こどもをアセスメントする方法とカリキュラムの基本とは合致するものでなくてはならないという考え方。

・学びの物語について

「テ・ファーリキ」において子どもの学びをナラティブな方法でアセスメントする学びの物語が（評価の方式として）導入されている。

この物語のよる評価（narrative assessments）、「学びの物語のポートフォリオ」は保育者が子供の成長と関心を追跡・探求するうえで有益な方法であり、保育の原理に基づいて成果を捉えることを可能にしている。同時に子どもや家族にとっての評価を有意義なものとし、子ども達が教育に向かって価値のあり学びを進めることを可能にし、子どもたちの学びの構えを育み、子どもが学び手として自己を認識するように促すものとしても有効である。

☆マーガレット氏の講演は保育・幼児教育カリキュラムについて、そして保育を評価する方法について、ニュージーランドで現在行われている幼児教育カリキュラム「テ・ファーリキ」を基にした内容で、日本の保育にとっても多くの示唆に富むものであった。実際の保育にどのように活かしていくことができるのか、今後現場の保育者との協働しながら考えていきたい。

2. 特別講座：「学びの物語」を実践することの意味

○司会者：鈴木 佐喜子（元東洋大学）

○報告者：鈴木 久美子・山田 真理子（東京 ありんこ保育園）

佐藤 寛子（お茶の水女子大学附属幼稚園）

○指定発言：マーガレット・カー（ワイカト大学）・大宮 勇雄（仙台大学）

新要領・指針において注目すべき特徴は、保育・幼児教育の具体的な目標を「幼児期の終わりまで育ってほしい10の姿」として示した点にある。そしてこの育ちを評価する新しい評価方法の導入が検討されている。

現在ニュージーランドで行われている「学びの物語（learning stories）」は、保育者と子どもの共感的で応答的な関わりを尊重しながら、子どもの育ちを評価するための有効な方法の一つと考えられており、いくつかの保育園や幼稚園の実践報告からその実際と有効性、課題についての報告があり、話し合いが行われた。

●鈴木久美子・山田真理子（東京 ありんこ保育園）発表要旨

一人の子どもの「かみつき」への対応について悩んでいたことがきっかけで、2009年から「学びの物語」の保育実践に「挑戦」し始めた。「学びの物語」の視点で記録を読み直すことでその子の行動の意味が「見える」ようになり、共感的で肯定的な姿が見えるようになった。「学びの物語」は子どもを信頼すること、子どもの行動には意味があること、応答関係が生まれることへの気づきを促し、保育者を遅く氏保護者を巻き込んで保育の質を上げることに繋がっていく。今後の課題として「学びの物語」の理論、哲学に基づいた保育計画の作成、子どもを権利行使の主体者とする子ども観・保育観の形成などの課題へも取り組んでいきたい。

●佐藤寛子（お茶の水女子大学附属幼稚園）発表要旨

子どもの自発的に遊ぶことを大切にし、子どもの主体的な生活を中心とした保育を行ってきた。「学びの物語」の視点で見ると、子どもの時間は等しく尊いものであり、子どもが始めたことには全て意味がある。日々の子どもの活動について語り合い共有し合う保育士がいることは保育を支える基盤になる。幼児期の育ちを保護者や小学校に対してどのように伝えていくのが課題であり、その点からも「学びの物語」について考えていきたい。

☆「学びの物語」を通し、保育者の子どもを共感的・肯定的に捉える子ども観・保育観の変化や、信頼感を基盤とする子どもや保護者との関係性に変化が生まれ、それが結果として保育の質を高める可能性についても示唆されている。今後「学びの物語」の理論や実践方法を基にした、個々の園の現状に合わせた様々な取り組みが行われていくことが期待される。

3. 国際シンポジウム

「幼児教育における学びや発達の評価はどうあるべきか—実践に生きる評価を目指して—」

○シンポジスト

ピーター・マンジョーネ（WesEd 子どもと家族学研究センター）

○指定討論者

田中孝尚（神戸大学附属幼稚園） 無藤隆（白梅学園大学）

○司会

浜口順子（国際交流委員会） 大迫章史（第71回大会実行委員会）

○話題提供

「幼児期の佐立や学びの評価のポイントは何か？—実践の向上、制作の伝達と DRDP—」

- ・ 学びの道筋と発達を観察するための形成的アセスメントツールの活用について
- ・ 「望ましい成果への発達プロフィール（DRDP）」について

●指定討論1 「幼児教育の可視化と質の継続的な向上を可能にする評価」

- ・ 資質・能力の発揮、伸長を可視化する実践記録の方法の模索（神戸大学附属幼稚園）

→子どもたちのありのままの発言、行動、仕草など（事実）をとって捉えることを実践記録のベースとする。

→事実に基づき、保育の場面を振り返りながら教師の解釈を書き込む。

→見えてきた子どもたちの発達の姿を「資質・能力」の観点から分析、評価する。こどもたちの10の姿をベースにした、円独自の評価基準を定めている。

→資質・能力については子どもたちがすでに身につけていた能力の「発揮」なのか、能力の「伸長」なのかについても着目し、考察を深める。

→事例、考察から得られた知見をカリキュラムの改良へつなげる。

●指定討論2 「評価の二つの新たな方向と質の改善」

- ・ ナラティブ・アセスメント

→物語、写真、映像などの記録をもとに子どもたちの姿を観察し、読み解く。その際、子どもたちの10の姿を活用しながら保育の改善を図る。

- ・ 尺度による客観的な評価

→例えば、えかーずの日本版など。エビデンスを収集し、政策提言を行う必要がある。現在の保育の予算はバブルである。しっかりとしたエビデンスをもとに予算が確保できるようにしなければ、幼児教育の質向上は望めない。

4. 学会企画 「実践研究へのいざない」

○企画者

戸田雅美（東京家政大学） 大豆生田啓友（玉川大学）

○シンポジスト

湯川阿貴子（太子幼稚園） 西隆太朗（ノートルダム清心女子大学）

○指定討論者

戸田雅美（東京家政大学） 堀智晴（元大阪市立大学）

●「保育における実践研究の課題と意義」湯川阿貴子（太子幼稚園）

幼稚園での実践をもとにした研究発表であった。現場で教師として保育を行いながら研究を行う意義と課題が語られた。

・実践者が行う実践研究の課題

→事例の収集方法と論文化する際の抽出、方法論の選択、保育者に浸透する暗黙の規範、実践研究論文は行間を読むことが求められる

・実践研究の意義

→日常に潜む保育の「あたりまえ」の姿を自覚的に見る、仮説検証的にかかわる、見守る力、子どもとかかわることが面白い

●「子どもと出会う保育学のために」西隆太朗（ノートルダム清心女子大学）

養成校の教員が保育現場を定期的に訪れ、実践研究を行った事例の報告であった。報告後の議論では、園外部の他者が保育に介入することの是非が問われていた。他者、大人の介入によって「子どもの世界を壊す」という考え方は根強いようだ。

また研究者自身が子どもと関わる事例研究が客観的な研究として認められるのか、という点でも興味深い内容であった。子どもと出会うことについて、独自の研究方法、方法論を確立しようという意気込みを感じた。

5. 自主シンポジウム

「子どもたちの100のことばとプロジェクト・アプローチの関係性を考える～レッチョ・エミリアとの対話を通して～」

○企画・司会

植村朋弘（多摩美術大学）

○話題提供者

森眞里（鶴川女子短期大学）片桐隆嗣（赤碕保育園）

徳田憲生（赤碕保育園）植村朋弘（多摩美術大学）

○指定討論者

刑部育子（お茶の水女子大学）郡司明子（群馬大学）

●子どもたちの100の言葉を見直す

・100の言葉を見直すと、ローリス。マラグッツィの込めたメッセージを改めて考える。大人へ向けた問いの形になっているのではないか。

●赤碕保育園の取り組み

年長クラス担任の徳田憲生氏の事例報告であった。イノシンというテーマで子どもたちのプロジェクトが進行していく。映像記録を交え、とても分かりやすい事例報告であった。特別な教育を受けている子どもたちというわけではなく、至って普通の子どもの姿が映し出されていることが印象的であった。子ども主体として、保育士が対等な立場で新鮮な目を持ち、面白がって子どもたち関わる様子が伝わった。ドキュメンテーションが非常に綿密に記録されており、それをもとに保育改善を行うプロセスが垣間見えた。保育記録への負担感を無くするための工夫（考察なし、考察空白のパターン、各時間の確保、共同執筆、他のクラスを記録するなど）が記録が教員間のコミュニケーションにつながる事例として、とても参考になった。

6. 自主シンポジウム「子どもが感じる世界を感じる」

○企画・話題提供者

林浩子（国立音楽大学）

○話題提供者

岩田恵子（玉川大学） 宇田川久美子（相模女子大学）

○指定討論者

佐伯胖（田園調布学園大学大学院）

●話題提供：「二人称的かかわり」（墨田区での共同的まなびプロジェクト）

- ・一人称的かかわり一対象を「私」と同じような存在とみなす
- ・三人称的かかわり一対象を「私」よ切り離し、傍観者的に観察する
- ・二人称的かかわり一対象を「私」と切り離さずに「かかわりあう存在」とみなす

二人称的かかわりを意識することでかかわりに応答性が出てくる。子どもたちとの遊びの中で起こる脱線が楽しめるようになる。子どものアイデアや行為に驚いたり、面白がりそれを共にしようとする。三人称から二人称になることでできないことよりも面白い方に目がいく。さらにもっとこうしたら面白いかもという発想が生まれてくる。

●指定討論：佐伯胖（田園調布学園大学大学院）

話題提供を受け、ドーナツ理論を例示しながら、学びの構造が解説された。特にI的世界（一人称）に世界を拡張させる闖入者としてのYOUの理論が興味深かった。保育者が子どもたちの外に飛びだそうとするきっかけになるためには保育者が子どもたちの「おもしろさ」に対して、身を委ねる勇気が必要になる。やらされている、準備されている状況では達成したという感覚は得られず、アイデンティティーには何も影響しない。

V. 参加学生の感想

●岡崎榛華（2年C組）

私が一番印象に残った研究発表は、父親を支える子育て支援、社会の構築～ポストイクメン時代へのアプローチ～です。

NPO法人やファザーリング・ジャパンの安藤哲也さんの講義を受けて、近年では昔と違い、子育ては母親がするもの、という概念から、子育ては父親も積極的に行うべきだ、というふうに変わってきたということがわかりました。その背景として、女性の社会進出があげられていました。仕事をしながら家事をこなし、さらに子育てを行うのはとてもハードなことであると予想がつきます。きっとこれらを毎日こなしていたらくたびれるでしょう。そうならないためにも男性が育児を積極的に行うことも必要とされています。

わたしは、男女平等な社会という言葉がたくさんきこえてくる今、子育ても性別に関係なく行うことが大切であると思いました。発表を聞いた中でイクメンパパというような言葉がたくさん使われていましたが、イクメンパパがたくさん増えればきっと、より良い子育て、より良い家庭につながると考えました。それは母親の負担を減らし、家族をより円満にすることができるからです。私がこれから保育士になるにあたって、保護者と関わるときに、母親だけが子育てをするべきだというような考えはなくして、こどもたちの周りの大人全員が子育てをしていくという思いを大切にすることで、母親だけに子育てを押し付けるような言い方をすることを防ぎたいと考えます。また、子育ては、みんなが協力しておこなうことが大切であるということを伝えていけると考えます。

今回の研究発表はとても難しくて考えが深いものばかりでした。これから私自身が保育士になるにあたって、たくさんヒントを頂き、とてもためになりました。今回学んだことを、こらからの自分自身の福祉観などに活かせるようにしていきたいです。

●高橋真奈美（2年D組）

私が印象に残っている講義は、子育てについての講義です。今の時代は主夫という言葉があるほど男性が子育てに積極的に参加していますが、男性には母性本能や当たり前ですが女性ホルモンが少ないため、上手く子どもと

関われなかったりし、逆にそれを見て女性ガストレス抱えてしまうケースがあるようです。そのため男性は子ども中心の子育てではなく女性を支える子育てをしたほうが効率が良いそうです。女性は旦那に話を聞いてもらったりするだけで心が楽になり、良いコミュニケーションを取る事ができ、良い関係を続けることができるデータが出ているそうです。女性にとって旦那は最高の相方であり、よき理解者なので、子どもを支えるのはもちろん女性を支えてあげることが大切だそうです。女性は、男性は元々女性のように子育てに向いているような身体の構成がされていないこと、不器用であることを理解し、子育てをしながら旦那を支えていく必要があります。この講話を聞いて、子育ては夫婦が支えあって理解しあって始めて成り立つものだと思います。これから結婚も子育てもしていくと思いますが、お互いがお互いを支えていきながら子どもと楽しく過ごしていけたら良いなと思いました。

2018年度 第24回FDフォーラム

「大学におけるダイバーシティ」

報告：高桑 秀郎

白崎 直季

I 期 日

平成31年3月2日（土）・3日（日）

II 会 場

京都府 立命館大学 衣笠キャンパス 以学館 敬学館

III 本学参加者

教授 高桑秀郎 講師 白崎直季



IV 概要報告（分科会に関しては参加した会のみ記載）

1. シンポジウム① 「大学に集う人々の多様性にいかに向き合うか」

○コーディネーター

山田 創平 氏（京都精華大学 人文学部 准教授）

・大学には多様な人々が集まっている。人種、民族、国籍、ジェンダー、セクシュアリティ、障がいの有無はもちろんのこと、世代、主に用いる言語、宗教、職種なども様々である。大学に多様な人々が集まっているという認識は、大学においてマイノリティの権利が侵害されないよう配慮する上で重要である。

○シンポジスト報告

①ウサビ・サコ 氏（京都精華大学 学長）

「大学における多様性の課題と意識改革」

・大学学長として、また、マリ共和国出身としての立場から大学のグローバル化と多様化について個人的経験を通した話がなされた。

●大学のグローバル化と多様化の問題について

・日本社会に変化をもたらしているグローバル化の進展とともに大学にも様々な問題が顕在していることに対して、ダイバーシティ宣言やグローバルビジョンを打ち出しているが、そもそも大学社会の中で誰が「社会的少数者」「社会的弱者」なのか、どのように個々人の属性が認識されているのか、これらの問いが十分にされないまま新しい提案のみが示されている。

●日本社会では様々な属性にカテゴライズされる傾向が多い

→来日して28年たつが、「アフリカ出身」「日本語は話せない」「肌が黒い」といった外的特徴がつかまとう。

●ダイバーシティの考え方

→京都精華大学ではダイバーシティを「多様なバックグラウンドや属性を持つ人々が違いを受容し合い、対等に機会が開かれること」と定義している

→制度や仕組みの整備のみを目指すのではなく、年齢、人種、性別、身体的特徴、性表現、など表面的に認識されやすいものから、国籍、宗教、家庭環境、出自、働き方、性自認、性的指向など表面では認識されにくいものに対して、不自由、差別、排除がないキャンパス環境を実現したい。

②日高 庸晴 氏 (宝塚大学 看護学部 教授)

「LGBTs が思春期・青年期に直面する生きづらさ」

●LGBT/性的マイノリティとは？

・博報堂D.Yホールディングス LGBT 総合研究所では、LGBT に関する意識調査を実施、全国の20～59歳の10万人（有効回答者数89,366人）を対象に実施したスクリーニング調査の結果、5.85%がLGBTであった。

・以前の東京都知事による発言から

「マイノリティは気の毒ですよ」「かわいそうなんだよ」

→こういった社会において、当事者の子どもたちは、自己肯定感と自尊感情を育てていくことができるのだろうか？

●2016年LGBTの意識調査から

・この調査から原因がわからなかった不登校の中にLGBTがあったことがわかった。

・先生はいじめの解決に役に立ってくれたか？

→解決に役立ってくれた先生は全体で13%。一方で、若年層ほど先生が助けになったと認識

・親へのカミングアウトの状況

→5人に1人が親にカミングアウト、都市部が高率な傾向、地域差あり

→カミングアウトがいいかどうかは別問題

・安心して話すことができるためには

→誰が性的マイノリティの当事者なのか、分からない

→マジョリティのいいわけ

→当事者の彼らにとっては、誰が本当の理解者かわからない

→教員の役目

→多様性を尊重する環境を整備すること

②松波 めぐみ 氏 (立命館大学生存学研究センター客員協力研究員)

「大学に集う人々の多様性にいかに向き合うか」

～合理的配慮は「転ばぬ先の杖」か？～

●大学に集う人々の多様性と「障害」

→障害学生は確かに増えている。

- ・そもそも「障害者」（便宜的に「手帳」所持者の数）は日本に 936 万人（全人口の 7.4%、15 人に 1 人）いる。
- ・発達障害のあったある学生の事例

→学業がうまくいかなかったことは自己責任にされてきた。

●障害者差別解消法とは？

- ・国際的な背景：障害者権利条約（2006 年 12 月の国連総会で採択）を批准するため

→2006 年まで国際基準がなかった。

- ・障害のある人は「保護の対象」から「権利の主体」へ

●新しい考え方「障害の社会モデル」

- ・一部の人を排除してきた社会のあり方こそ問題である。

→段差、情報保障がない、偏見など、社会のバリアこそが権利を奪っている。

→社会環境が変われば当たり前に参加できる

- ・解決の責任は？

→バリアをなくすのは社会全体の責任

●合理的配慮とは何か？

・障害のある人がバリアで困っている時、「こうしてほしい」と意思表示をすることをきっかけに、環境の整備・変更をすること。

→大事なのは対話。対応できない場合もきちんと説明をする。

④あかた ちかこ 氏（大阪市立阿武山学園 専門講師）

大学に集う人々の多様性にいかに向き合うか

～周縁で考える少数派と多数派のこと、そして、多様性を担保することの意味～

●どんな立場でここに？

→児童自立支援施設（少年院のようなものに近い）という、支援を必要としている人が大学よりもたくさんいるような場所で、普段働いている対人援助者という立場。

●児童自立の今の難しさ

- ・児童の方向性にも職員の方向性にも変化がある。
- ・昭和テイストの不良が減り、性加害児童と軽度の知的障害や発達障害の診断が増加傾向。

→カウンセラーの数を増やす？

→プログラムをたくさん導入する？

→もっと「傾聴」をがんばる？

●いつもつぶやく言葉

- ・「背景を想像しよう」
- ・「現状は、結果である」
- ・「人は皆、人生を背負って行動を決める」
- ・「せっかくこんなところまで来たのだからなにか良いことでもないかね！」

●さて、大学は？

- ・多様性を担保することは、少数派のため？

→少数派はたまたま

→学問の発展のためには、結局、少数派を考えることは自分たちのため。

- ・多様性を前提にすることは、私たちに何をもたらすか。

シンポジウム② 社会人の「学び直し」と大学教育

○シンポジスト報告

①稲永 由紀 氏（筑波大学 大学研究センター 講師）

「社会人の『学び直し』が大学教育の何を変えるか？」

②野澤 正充 氏（立教大学 副総長／立教セカンドステージ大学副総長）

「“もう一度学ぶ” 50歳からの再チャレンジ」

伊丹空港からのバス乗継の不具合で1時間、遅れて参加したため、ここまでの内容は聞く事が出来なかった。

③岡田 忠克 氏（関西大学 学長補佐／人間健康学部教授）

「社会人の学びを考えるー関西大学大学院改革の議論を例に一」

- ・数十年後の日本社会

→ここ 10～20 年程度のうちに自動化される可能性の高い仕事が半数近くある。今後、どのような職業でも必要になるのは、自ら考え、主体的に行動し、謝意の変革を実現していく力。

- ・新しい能力

→これまでの生き方の「定番」が揺らぐ（例として、終身雇用制の解体）。そのため、今後複数のキャリアチェンジ、キャリアトラックが必要になってくる。

- ・社会人の大学院進学について

→科目等履修生は年々増えており、社会人の学び直しのニーズは高い。彼らは目的が明確で、実践的なものを求めている。現役学生の大学院進学とは意識差があり、研究者育成とは異なってくる。また 18 歳人口の減少により、今後、社会人の大学院進学については、生き残りの方策として考える必要がある。事実、社会人入学者は増えている。一方で外国人をどう受け入れるかも課題となる。

リカレント教育の一環になる。実際、社会人が大学で学び直す際には、まだ現役で働いている人も多く、土日、夜間に授業を開講してほしいという要望が多い。一方、文部科学省はコース枠を充実するよう指導してくるが、午前中あたりに講義を設定すると受講者を集めるのが難しいという問題が出てくる。

- ・マッピング

→学内からの大学院進学者は年々減っている。留学生については、日本語のできる、できないの問題と専門性の問題が必ずある。また学力についても以前とは異なり、大学院レベルに必ずしも達していない学生も多い。今後、大学院をどうデザインしていくかが大きな課題となってくる。

- ・コースワークを基盤とした修士論文を課さない大学院の提案

→修士課程修了の要件を緩和する。教育課程の在籍を 1 年以上、論文をなしにする。そのことにより就職浪人対策としても有効である。また通常の大学院コースへの転化も可とする。

- ・留学生ターゲットの大学院カリキュラム

→オールイングリッシュコースや日本語文化コースリサーチワークの既存大学院教育プログラムとの共通教育。

→東アジアとのジョイントディグリー。日本の学校法人が現地の法制度に基づいて法人を設立。日本の法人が運営費を捻出、教職員の派遣、現地での採用も込みで、当学校法人の理念に基づく教育を提供。

→協定による連携。日本の大学が現地の大学と協定を締結し、現地の施設を借用しながら日本の大学の教育を提供。オンラインによる授業提供もあり。

・リカレント教育

→就職活動対応としての拡大。既存の研究科組織を残しつつ、学際を基盤とした教育課程を構築。「三大学医工薬連携科学教育研究機構等」。

→生涯教育の継続発展・セカンドキャリアの充実。放送大学受講者を中心としたセカンドステージ教育プログラム。本学教員中心と外部講師中心の二本立て。

→社会人の学び直し。キャリアを中断した女性をターゲットにしたキャリアアップ教育プログラムの構築とものづくり系のキャリアアッププログラム。MBA、MOTプログラムの構築。

・課題の整理

→大学院の特徴、多様性をどう担保するか。ターゲットは誰か。

④平井 聡士 氏 (学校法人立命館 立命館大学 総務部 秘書課長)

「社会人の『学び直し』と大学教育 ～『学修経験者』『大学職員』の立場からの課題提起～」

・平井氏は、昨年MBAを修得した。大学内では教学担当の職員である。

・社会人学習者について

→社会人学習者は一部の意識の高い人たちだけでなく、潜在的にはかなりの数がいる。しかし、そうした社会人の興味、問題意識、学びの意欲が学びの枠組みに繋がっていない。それは大学側がニーズの取り込みができていない、あるいは掘り起しが出来ていないからではないか。学び手の多様化、手段の多様化、目的も多様化し、社会人の学び直しと言ってもその方向性は多岐に及ぶ。

→大学公開講座の受講者数は増えており、自分の仕事に反映させたり、役に立てたりして、大学での学びを自分のバージョンアップにつなげたいと考えている社会人は多い。一方で 25 歳以上の 4 年制大学入学者割合を見ると日本は他国に比べて少ない。

・学びの類型化～自分の学び経験より～

→組織内（企業内）の学び～立命館「大学行政研究研修センター」～

学内外講師によりレクチャー、職員部長、次長によるゼミ、政策立案論文作成、紀要発行・書籍化、業務において感覚的に感じていた問題意識を具体化。データに裏打ちされた「説得力」を用いて、現場を巻き込み政策化をはかる力量形成、職場は政策提起された課題を具体化。

→海外での学び～語学研修・UC Berkeley International Diploma Program・インターンシップ～

語学力向上、異文化理解、適応。海外の高等教育情勢、海外大学における教学・学生支援・国際交流施策の理解。ビジネススキル習得。異業種交流など。

→大学院での学び～立命館 MBA～

これまでも様々な学びの機会を得てきたが、何故改めて大学院で学ぶか？

「理論」と「実践」の往還であり、インプットの重要性を感じたから（学び方を学ぶ、学習習慣確立、論文作成など）。また、他業種、他分野の人と関わることで、人とのつながりを持つこととその世界を理解できる。大学職員としてではなく、学生として大学と関わる、教職員を知ることの重要性。立命館で学ぶことの重要性（職員経験、学生経験の往還）。

→仕事・職場を通じた学び

初任配属時の経験がもたらすもの（組織社会化の過程に目を向ける重要性）。具体的仕事+大局観の醸成〜どの部分について大学教育がリンクできるか。「仕事外」、「職場外」の学びのタイミング、仕事とのバランス。「仕事から学ぶ」ことに集中する時期も大切。

・社会人の「学び直し」の現状と方向性

→知識が現代社会の中心的資源となったため、大学に教育と研究に加えて社会への貢献が機能として加わった。すなわち知識の応用に力を入れ、社会に成果をもたらす応用分野を中心に学部編成を行うことが求められていくと1969年にドラッカーが主張したが、50年を経過し、大学は社会との関わりにおいて、本質的变化を果たせているか。知識とは電機や通貨に似て機能するときに初めて存在するという一種のエネルギーである。にもかかわらず、知識を単なる知識として得るだけで、知識を利用していこうとしないところに、社会のニーズと大学、「社会人の学び」と大学教育の乖離が発生するのではないか。

・組織と個人の関係

→組織は個人にその投資費用に見合った貢献を期待し、継続的に組織に属することを期待する。教育訓練や人的資本が特殊であれば継続的な所属、貢献が期待できる。育成したい個人は、教育訓練によって力量が高まり、長期にわたって組織に貢献する。

・正社員の学び直しの障害

→7割強の労働者が「学び直し」に問題を抱えていると回答。多いものは「仕事が忙しくて学び直しの時間がない」、「費用が掛かりすぎる」が二大問題点。

・企業の外部教育機関としての大学の位置づけ

→企業の8割が外部教育機関として民間の教育訓練機関を活用する一方、大学を利用するのはごくわずか。大学を活用しない理由の上位は「大学を活用する発想がそもそもなかった」、「大学でどのようなプログラムが提供されているか分からない」である。

→副業や離転職の活発化、雇用の流動化は進展すれども、組織と個人の関係は不変である。「知識」の意識を変化させない限り、雇用の流動化と大学における社会人教育はマッチしない。高齢者の雇用や仕事の継続は進む一方で、その状況と大学教育（社会人への教育）はつながらない。

・「組織」と「個人」の関係性を踏まえた展開

→大学教育と組織固有の特殊性がリンクすればするほど利害は一致する。大学側も企業・個人のニーズを取り込むことで社会貢献にもつながる。

・大学における社会人教育は仕事との関連のみをとらえるものではない

→「仕事以外の学び意欲・目的」から捉える方向性、若年社会人と老年社会人の仕事に対する価値観の異なり、社会とのつながり、貢献の多様化、芸術・文化・教養への関心の高まり、社会活動のコアベースとしての大学の有用性などを考える。そして大学の財産をどう活用できるか？

・大学としても踏まえるべき視点

→機会費用に目を向けることの重要性。仕事、家庭、趣味のすべてが学び。「学び」間でも、大学での学びとその他の学びは競合する。

→人生100年時代。仕事の複線化やキャリアチェンジ、雇用の流動化が与える影響について

→世代を超えて有用性をもたらす社会人教育の在り方はあるのか？ライフステージに応じて教育対象者を焦点化すべきか？

→大学という「場」の信頼性、重要性

・大学職員の視点から

→大学（大学関係者）の固定観念に目を向けること。社会人、そして企業や社会は大学にどこまで期待を寄せ

ているか？（大学教員の研究、教育、「今」の大学の状況をどこまで知っているか。）大学での学びを志向する社会人は、学位取得（学位・卒業）にどこまでこだわっているか？18歳学齢期層と社会人の「入りたい大学」は同じか？大学における社会人教育を「ニーズがない」、「本来の大学教育の在り方」とマッチしないという理由で距離を置いていないか？大学の総合力をもって、大学の都合ではなく、学習者に資する視点での展開が求められているのではないか？それこそが大学の社会貢献に繋がり、新たな連携による研究・教育の発展につながるのではないか？大学を取り巻く環境、大学運営（経営）上からも社会人教育を梃子とした改革が求められているのではないか？

・必要とされる視点

→大学の都合ではない、学習者の視点からの検討。個々の学部、研究科の枠組みを超えた全体最適の視点での意思決定。大学が持つ「財産」（人、教育研究リソース、ネットワーク、キャンパス、施設など）の活用。社会のニーズを認知するアンテナの高さ、社会のニーズと大学のリソースを連関させる力量。顧客（学習対象者、マーケット）は誰か？その目的、成果は何か？

・必要とされる「学び」

→大局観、全体最適の視点を持ち、時代の変化を読み解く力量。「大学が貢献出来ること」を社会（学外）から捉えることが可能な知識、経験、ネットワーク。大学の文化や大学におけるオペレーション全体を理解した上で、学内関係者と協働する力量。社会連携や大学による貢献を教育・研究に還元する力量。大学の「財産」を、活用・組み合わせるコーディネート力量（教員の研究、教育、社会活動を理解すること）。大学「経営」力量（マーケティング、財政、組織運営）。

◇以上の4件の報告後、フロアディスカッション、パネルディスカッションへと続いた。

フロアディスカッション課題

講演についての共有、講演を聞いての感想、興味深かった内容、疑問点、質問内容の決定。

パネルディスカッション要旨

○指定討論者

①吉貞 正流 氏（公益財団法人大学コンソーシアム京都副事務局長）

・大学コンソーシアム京都 生涯学習事業について

→大学コンソーシアム京都の概要説明と現在進めている事業、特に生涯学習事業の紹介があった。また今後の事業の方向性の説明があった。

パネラーに対する質疑応答内容

・入試はどのようにしている？合格率は？広報は？

→（野澤氏）入試方法はエッセイと面接。合格率は100%。広報は雑誌やメディアが取り上げてくれているので注目度は高い。池袋キャンパスの利便性は高いが、狭いのが課題。一方で学内の認知度が低いのが問題である。高めていく持続性が保てない、社会人に何を教えていくかや教員の確保が課題。

・運営と人的リソース、費用はどうなっている？

→（立教）一時的に赤字になったが、今は黒字。学外者を講師と招くときは非常勤講師扱い。受講者だけでなく、講師の先生方も定年退職された2ndステージの先生が多い。

（関学）学内の先生は非常勤講師の半額の費用で担当する。学外者は非常勤講師扱い。

・実務家教員について、役に立つか？

→（家永氏）現場を離れて5年経つと現場感覚がなくなるので、現場と大学の立場を理解した人がやるとよい。

社会人が入ることによって教員側の変化として、自分がやっていることを相手に伝えるにはと相手のことも考えるようになる。

→ (野澤氏) 人による。経験談だけではもたない。しっかり考えて大系的に伝えられる人を選ぶことが大事。専任として採用は難しいが、特任なら可能。授業のスタイルとして教員が授業に遅刻しなくなる。費用対効果に対してシビアになる。また教員間の交流によって新しい視点が広がるメリットがある。

→ (岡田氏) 役に立つ。理屈でなく学生に具体像をイメージさせることができ、具体的である。社会人は課題を持っていてそれを教員にぶつけてくる。それにより教員の側も意識を高く保て、現役学生にそのやり取りを見せてやれる。それも楽しい。

→ (平居氏) 大学としての多様性となる。社会人が入ることで大学としての取り組みや教員に対して厳しい目を向けることが可能になる。それは大学にとっても大事なこと。

・教員も多様、学ぶ側も多様。それは大学にとってどのような意味を持つか？

→ (家永氏) 大学という知識を持った資源が広がる。

→ (野澤氏) コストがかかる割に収入には結びつかない。しかしリベラルアーツが広くとらえられ、学び直しが意味をもつ。

→ (岡田氏) 一学部一学科だけでなく横のつながりを見せて社会人のニーズをキャッチしていくことが大事。大学にとってはチャレンジしていく価値はある。

→ (平居氏) 大学全体、教育全体を見る良い機会となる。

→ (吉貞氏) 大学コンソーシアム京都では、ワークをしながら研鑽を積むプログラムを展開している。

2.分科会

「第3分科会：学生エンゲージメントと自立を促す支援としかけ ～学生に関わる専門職の立場から～」

報告 高桑秀郎

<概要>

大学における学生エンゲージメントと自立を促す支援としかけについて、アカデミック・アドバイジング（学習・大学適応）、心理カウンセリング（心理・発達）、キャリアサポート（進路選択）と言った三つの異なる専門的立場から報告・検討を行った。それぞれの取り組みの中で、学生と支援者とが、どのように関係性を構築していくのか、そこでの関与の質量やダイナミクスを学生エンゲージメントの視点から捉えた。日常関わっている学生を違った視点から捉え直し、エンゲージメントや自立を促すための関わり方について、新しい視座や方法を得たい。午後からは参加者それぞれが学生との関わり方の中で抱えている問題点をどのように解決していくかの意見交換を行って行く。

○コーディネーター

山田 剛史 氏（京都大学 高等教育研究開発推進センター 准教授）

・本分科会の主旨

→昨今の社会的、時代的背景を受けて高等教育機関は教育改革に駆り立てられているが、それは「誰のための、何のための改革」か？近年の教育改革は組織的・制度的なものが多い。それでも学生の学びや成長の促進に寄与しているのであれば、教員としては前に進まざるを得ないが、どうも怪しいと感じるケースやデータを目にする。そこで学生との「関わり」をキーワードにエンゲージメントと自立を促す支援の在り方やしかけについて、学生に関わる専門職の立場から、話題提供をお願いし、そこから見えてくる学生の実態や傾向を共有し、日常関わっている学生を違う視点から捉え直し、エンゲージメントや自立を促すための新しい視座や方法を得る。

○報告者

①清水 栄子 氏（追手門学院大学 基盤教育機構 准教授）

「学生エンゲージメントと自立を促す支援としかけ ～アカデミック・アドバイジングの場合～」

・アカデミック・アドバイジングとは

→学生本人による学生自身による将来の目的・目標の決定とその達成に向けて、担当者が途中段階のアセスメントを行いながら個人のニーズに沿った支援を行うことで、入学から卒業するまでの全学生が対象となり、教職員、学生、専門職などがその担当に当たる。手段は面談（1対1、グループ）、電話、メール、ワークショップ、Facebook や Twitter などの SNS を用いる。

・学生の自立を促す支援と仕組み（事例紹介）

→大学院生による学習支援 スタディ・ヘルプ・デスク（愛媛大学）

共通教育科目を中心に個別指導を行うほか、勉強の仕方についてもアドバイスをを行い、大学での様々な学びをサポートする。目的として、学生の学力低下や多様な学習ニーズに応える。勉強が分からなくなり、退学する学生を減らす。学生の声を拾い、教員にフィードバックすることで教育改善に活かす。学生対応で工夫していることは、代表的なものでは、ゆっくり初めから説明する。何が分からないかを本人に自覚させ、答えを教えるのではなく、考え方や調べ方を伝える。こちらの話を聞いているだけだと考えなくなるので、出来るだけ学生に話をさせるよう意識した、等がある。日本の大学生は入学時に何を学びたいかがはっきりしていないので、今の学習が今後どう生きてくるのか結び付けられない。先輩の話を聞くことで将来を意識できるようになりモチベーションの向上に結びつく。

→専門職による支援① Student Success Program（立命館大学）

学生「一人ひとり」が正課と課外すべての学生生活を通じて学びの主体として「自立」し、最大限の「成長」を遂げられるようになるための学生支援。正課と課外の両立に困難を抱えている学生への支援とクラブ・サークル等の団体運営やマネジメントへの支援がある。一人一人が自分に応じた目標を設定し、7その到達に向けて、一人ひとりに適したサポートを行う体制がとられている。

→専門職による支援② アカデミック・アドバイザー（金沢大学）

対象学生は総合教育部学生で、学生が卒業・進路に向けて充実した学生生活を送れるよう支援する履修相談をはじめとしたさまざまな教育活動を指し、学生の学類移行支援を主な目的としたアカデミック・アドバイジングを提供している。担当は、理系、文系それぞれ1名。具体的なサポート内容は履修相談、情報提供、学類・他部署との連携、学修支援。

→学部生による新入生への大学適応支援 入学前教育プログラム（追手門学院大学）

主に推薦入試などによる入学予定者を対象に3月上旬に実施している。目的は自己との対話や他者との真摯なコミュニケーションを通じて、大学入学時から卒業までのイメージに対する理解を深め、本学の教育理念である「独立自彊」と「社会有為」を体現する人材となる基礎を築くこと。学生スタッフには全6回+予行演習の事前研修が実施される。学生スタッフを希望する理由としては、友人・先輩に誘われた、自己の成長ができると考えたからなどがある。学生スタッフを経験すると活動を通じて多くの対人スキルを身に付けたと実感できる。

・まとめ 学生エンゲージメントを高める工夫

→学生について十分理解する。適切なアプローチを選択する。学生との有意義な意思疎通に努める。学生が成功への道を描くことを支援する。学生の成功のためにチームによる支援を行う。正課併行プログラムでの学習機会に結びつける。様々な経験の機会を探し、学ぶよう促す。担当者の強みを活用する。

②杉原 保史 氏（京都大学 学生総合支援センター／カウンセリングルーム センター長／教授）

「学生相談の現場から豊かに悩む能力の育成」

・学生相談に訪れる学生像の変化と学生相談の現状

→「相談の秘密は守られます」は誰のためか？相談に来る学生のニードとして先生や親に知らせて欲しいが高まってきている。一方の教員や親も学生のことを教えて欲しいというニードが高まってきている。

→「誰でもいいから、今話したい」と相談口に来て、一方的に話をしていく。こちらの都合を伝え、別の時間帯を指定しても来ない、次回の予約もしない学生が増えている。これは学生が問題を抱えられる能力の低下を示すのではないかな？

→相談に来る学生の特徴として対人スキルや生活スキルが乏しく、現実的で常識的な指導が必要である。スマートフォンがあると大概の問題を解決することが出来るので、コミュニケーションスキルが発達しない。サイコロジカル・マインドが乏しく、過度に単純な答えを求める学生が増えた。自分の感情に対して感じることでできないメンタライジング能力が未発達な学生が増えた。これは成育歴の中で養育者が、自己の内面に向き合わせるような働きかけをしていないことによって起きている。以前よりも、面接室で激しい感情を示したり、行動に移したりする学生が減った。精神障害は軽症化するとともに、欲求、願望も薄い。こちらのアドバイスに依存し、些細なこともどうしたらよいか聞いてくる。そうした学生との関わりで内面への探索の取り組みが見られたりすることもあることが希望となる。

・悩まない・悩めないという学生

→本来、青年期は平和な成長が阻止される時期であり、安定した平衡状態が保たれること自体が異常である。大学カウンセラーの立場からの感触として、20世紀終わりごろから来談学生の印象が変化してきた。自分の問題を自分の問題として苦悩を語るができず、問題に主体的に取り組めない生産的に悩むことができない学生が増えた。

→大学は青年にじっくり悩む時間を与えていない。昭和33年の学徒厚生審議会答申は学生の人格形成に対する大学の責任を述べているが、現在に至るまで、この点に対する大学の取り組みが遅れてきたことは否めない。大学改革実行プラン（2012）や国立大学改革プラン（2013）においてグローバル人材の育成やエンプロイアビリティ（語学力・コミュニケーション能力・プレゼンテーション能力・ビジネスマナーなど）の育成が謳われている。具体的には、内面から自発してくるあいまいな感覚を感受する能力、他者の意図や動機や感情を感受する能力、それらを適切な人と場所と時間を選んで表現する能力、他者に適切に依存する能力、他者と協同で作業に取り組む、一体となって楽しむことができる能力、分からないという感覚を抱えておける能力、少々の批判には耐えられる能力、非合理的な批判を跳ね返す能力、自分を大事にする能力、世界の不思議への好奇心に開かれている能力、自分のアタマで考える能力。

・豊かに悩む能力を育てる

→豊かに悩む能力を育てるには安心感のある環境の保証。外見上の効率低下をいとわず、本人のペースに合わせる。足踏みしてもゆったり構える。周りが焦らず、当人を焦らせない。時間をかけて関わる。悩むことに価値を見出し、お金をかける。深い依存が高い自立をもたらす。安全基地があるから挑戦できる。現代の学生が抱える主体性の低下や依存度が高いことは、それまでに高い依存を経験したことが少ないからである。

→豊かに悩める能力を育てるには豊かに悩めるよう助ける（課題）。具体的には、悩むことと逃げることをきちんと区別する。取り組むべき課題を明確にする。目標設定を助ける。小さな具体的目標を設定し、励ます。小さな達成をはっきり認め、嬉しがって見せる。大きすぎる目標を分割し、適正化する。多様な見方を促す。本人のペースで取り組める課題の設定が大事である。こちらの想定より低いところで躓いているので、短いスパンで低い目標設定を行う。

→豊かに悩める能力を育てるには豊かに悩めるよう助ける（関係）。本人の感じていることに関心を寄せる。支援者が感じていることを伝える。関わり、つながりを相互に体感する。関わりを通して共に成長することを喜ぶ。

・学生支援の3層モデル

→第1層：日常的学生支援 — 教室における指導、研究室運営、教務窓口

第2層：制度化された学生支援 — クラス担任制度、アドバイザー教員、チューター制度

第3層：専門的學生支援 — カウンセリングルーム、キャリアサポートルーム、障害学生支援ルーム
健康科学センター、留学生相談室

それらの3つの階層間でよりよく機能させるための研修や情報交換、提言を行って行く必要がある。

③家島 明彦 氏（大阪大学 全学教育推進機構 講師／キャリアセンター 副センター長）

「大阪大学におけるキャリア教育・支援の取り組み事例 ～学生エンゲージメントの観点から～」

大阪大学での家島氏の主な業務は①教員研修（FD）、②キャリア教育（授業）、③キャリア教育（就職支援）である。キャリアセンター教員としての業務として学生の育成、システムの構築、支援体制の整備がある。

氏の大阪大学でのキャリア教育・支援の取り組みを紹介し、それらを学生エンゲージメントの観点から検討する。

・授業実践事例「現代キャリアデザイン論」

→全学部・全学年を対象としたキャリア教育科目。ICTツールの活用で双方向型授業を実現するとともに受講生データの収集・分析を行い、授業改善に役立てている。シラバスに「受講生の声」を掲載したり、授業で学生が作成した授業のプロモーション動画を YOUTUBE など公開したりしている。授業の中で大切にしているのは理論と実践のバランス、インプットとアウトプットのバランス、ほぼ毎回のワーク、ICTの活用である。獲得してほしいものとして最低限の知識（学び方）、確かなスキル（学んだという実感）、豊かな人脈（学び合う相手）とのこと。少人数による時間制限のあるグループディスカッション（全員の発言が必須）では新しい話題の提供や前回授業の振り返りと発表がある。学部や学年を超えた受講生、講師と議論や対話しながら学ぶのが特徴。

・正課外のキャリア支援～進路・就職相談～

→大阪大学では3キャンパスにおいて平日毎日、資格を有するキャリアアドバイザーによる進路・就職相談を実施しているが、2014年度からオンライン予約システムを導入したところ、普段自分がいるキャンパスでない相談室を利用する学生の存在が明らかになった。現代学生が求めるキャリア支援のみならず、学生エンゲージメントを高める学生支援の在り方も検討したい。

・ピア・サポート制度～キャリアサポーター制度～

→キャリアサポーターとは進路（内定先・進学先）が決まった最終学年の先輩学生のこと、後輩学生（就活生・大学院進学希望者の支援活動を通じた人脈づくりや自身の成長が目的であるが、大学のブランディング戦略にもつながっている。学生エンゲージメントの「学生支援と自立のパラドックス」や「発達を促す学生支援」という観点から見るとキャリアサポーター制度は効果的な取り組みかもしれない。

・総括

→現代学生の特徴の一つとして、成長意欲を持ちつつもアウトプットの仕方を知らない、自分ではどうしてよいか分からない学生が多い。そうした学生のために、キャリア教育・支援においても学生エンゲージメントの視点を持った教職員の情緒的・情動的サポートが重要と思われる。

○参加しての感想

「手をかけるほど自立から遠ざかる」が「低い関与ではモチベーションが上がらず、帰属意識や愛着が形成されない」。関与の程度が学生の学びと成長に大きく関わっている。まさに本学が抱えている仕事の量の増大と関連している問題であった。担任やゼミ教員、教務、学生担当は個々で学生に対し、十分に関わっている。それぞれのアプローチを無駄にしないためにも、教職員間での情報共有と全体を見通した指導システムの確立の必要性を感じた。

◎第8分科会

「セクシュアル・マイノリティ学生にやさしい大学づくり」

報告 白崎 直季

<概要>

セクシュアル・マイノリティ学生にやさしい大学のあり方を、教職員と学生のそれぞれの立場から、当事者目線で考える機会を持ちたい。国際経験豊富な先生方から、諸外国での取り組みをご報告いただくとともに、ご自身の地域における取り組み、さらには全国の大学の取り組み状況などをお伺いする。その上で当事者学生の要望や実情などにも耳を傾け、将来的に誰もが居心地よく過ごせる大学のあり方を模索したい。

報告1：「性的マイノリティ学生の学生支援について」

学校法人関西大学管財局管財課 松田 優一氏

関西大学における性的マイノリティ学生に対して、大学職員の立場からの対応が報告された。

○性的マイノリティに関する社会の動きについて

- ・性的マイノリティに該当する層：7.6%（2015年）→8.9%（2018年）
- ・「LGBT」という言葉の浸透率：37.6%（2015年）→68.5%（2018年）
- ・東京レインボープライド（2012年からやっているイベント）の動員数：約15万人（2018年）
- ・性的マイノリティに配慮した自治体や企業の取り組みが、逆に「差別を助長する」と当事者から反発を受けた（2018年）

○大学の取り組み状況の例

- ・ダイバーシティ推進等の基本方針の制定
- ・性的マイノリティの学生の対応ガイド等の作成
 - ・講演会等の開催
 - ・専門部局の設置
 - ・施設の改修
 - ・性別欄の廃止や通称名の使用を許可
 - ・女子大学における性自認に基づく入学保障

○学生支援とは

- ・「学生」＋「支援（サポート）」
- ・学生の安心・安全を守ること
- ・様々な取り組みを通して大学のミッションを達成できるようにすること。
- ・学生が当たり前の学生生活を送ることができるようにすること。
- ・これは全ての教職員の責務

○カミングアウトしやすい人の特性

- ・自分のことを理解してくれる。
- ・口がかたい。
- ・安心できる。

報告2：「教職員に求めたい「多様な性」の知識と意識

明治大学文学部心理社会学科臨床心理学専攻 佐々木 掌子 准教授

性の多様性に関する前提知識と教職員に求めたい3つの意識が報告された。

○LGBTの功罪

- ・カテゴリは、簡便で便利なもの
 - ・自分のアイデンティティを探索する際、自分にぴったりしたカテゴリが見つかり、安堵感を持つ。
 - ・他者のセクシュアリティが知っているカテゴリに当てはまると安堵感を持つ。
- 一方、カテゴリは‘大雑把な区分け’でもあるため、性現象を丁寧に繊細に捉えるのは不向きである。

→LGBTTIQQ2SA / LGBTQQIAAP

○性同一性(Gender identity)

- ・自認(self-recognition)ではなく同一性(identity)
- ・自分の性別や性のありようを自分で認めることに障害がある(=性自認障害)のではなく、時間的に社会的に性別や性のありようの斉一性、一貫性、持続性が、社会的機能低下を起こしている(=性同一性障害)状態。

○性役割(Gender Role)

- ・ある性別に付与された役割
- 男性はズボン、女性はスカート、
→女性は妊娠、出産し、男性は妊娠をさせる
→女性は気が利く、女性は依存だ
→男性は指導力がある、男性は粗野だ
- ・社会や文化、時代によって異なるだけでなく、個人によって性役割行動の定義が異なる。
 - ・ポイントは性同一性とは独立した概念であること。

○性的指向 (Sexual orientation)

- 恋愛や性愛の対象となる性別
- ・性同一性が女性で、性的指向が男性→異性愛女性(ヘテロセクシュアル女性)
 - ・性同一性が女性で、性的指向はどちらかといえば女性→両性愛女性(バイセクシュアル女性)
 - ・性同一性が女性で、性的指向が女性→同性愛女性(レズビアン)
 - ・性同一性が男性から女性に移行して、性的指向が女性→レズビアンのトランス女性

○性はグラデーションとは？

- ・性には、身体的性別、性同一性、性役割、性的指向などの構成要素がある。
- ・さらにそれぞれが独立した概念である。
- ・各要素をどの程度の強弱で持っているのかがその人のセクシュアリティの個性であり、2人として同じセクシュアリティを持つ人はいない。

→ヒトのセクシュアリティは、カテゴリでは捉えきれない‘豊かさ’を内包する

○教職員に求めたい意識①

- ・性的マイノリティというマスで考えるのではなく、個別具体的な人として考える。

○教職員に求めたい意識②

- ・セクシュアリティは重要な個人情報であることを強く意識しておくこと

○教職員に求めたい意識③

- ・過度な「異性愛主義／男女二元論」を問い直す

報告3：Sexual Diversityを受け入れる大学

鳴門教育大学 葛西 真記子 教授

鳴門大学での調査と、当事者への支援の必要性についての報告がされた。

○なぜ、大学でセクシュアル・マイノリティ対応が必要なのか

・学生にとって専門知識を身につけるだけでなく、社会とのつながり、就職に向けて、将来について考える重要な場である。

- ・当事者の学生にとっては、様々なハラスメントに遭遇する可能性がある。

- ・鳴門教育大学の場合は、教員になる学生にとっては、これから対応する児童生徒の理解のために必要である。

→実習先へのお願いが必要なため、可視化が大切である。

○当事者の学生に対する大学での調査 2017年

- ・大学でセクシュアル・マイノリティの広報活動を行っている 4%
- ・セクシュアル・マイノリティの人権をテーマにした研修に参加 2%
- ・相談室の担当は専門の知識を持っているか ほとんど持っていない

○セクシュアル・マイノリティの学生の支援についてまず何ができるか

- ・ジェンダー／セクシュアル・マイノリティの専門相談員を置いた相談窓口の設置
- ・学生生活ハンドブック
- ・ユニバーサルトイレの案内
- ・学生定期健康検診の個別対応
- ・性別記載に対する申し立て案内

○授業においては

- ・教員が差別的な言動をとらない
- ・男女に分けた教育内容、固定的なジェンダー規範を見直す。
- ・アンケート等の性別欄について考える。
- ・男女ペアワークについて再考する

○疑問

- ・肯定的な人と否定的な人がいるのはなぜか？
- ・Allyになる人とならない人の違いはなにか？

→アメリカの研究結果をまとめると

①LGBT当事者との個人的な関係、意味のある関係、家族や地域での職業的な関係や個人的な関係という「関係性からの動機」

②正義、宗教、人権など「価値観に基づいた動機」

③多数派としての抑圧や特権の自覚という「罪の意識に基づいた」動機がある。

○日本においては？

- ・マイノリティ共感がある

→自分も何かのマイノリティであるという自覚

・一つのマイノリティを理解することで、他のマイノリティの理解へつながる（自分がマイノリティだと思うかどうかは関係なく）

○参加しての感想

今回、シンポジウムも分科会においてもセクシュアル・マイノリティについての報告を聞くことができたが、セクシュアル・マイノリティについての知識などほとんどなく、新しい発見ばかりであった。小中学生にも増えているという報告もあることから、今後多様な学生が増えていくことが想像できる。また、鳴門大学の葛西教授の報告にもあったように、当事者の学生が実習に行く際に配慮が必要だったということから、今後本学にも多様なバックグラウンドを抱える学生が入学してきた際に配慮が必要になってくるといえる。そのような事態に柔軟に対応していくためにも、まずは正しい知識を身につけることと、いつでも対応できるようなシステムを少しずつ導入していく必要性を感じた。また、多様性を受容し、どのような立場の人も対等に過ごせるような環境整備についての理解を学生にも伝えていけるような働きかけを行っていきたいと感じた。

平成 30 年度 教員個人目標に対する自己評価

(年度当初に明文化した目標一つ一つに対して反省と今後の取り組みをご記入ください)

役職	学 長・教授	教員名	渡邊 洋一
－授業としての取り組み目標－			
<p>本学の教育における担当授業の意義と、その中における個別の授業の位置づけについて、学生にわかりやすく伝えたい。</p>			
今年度の反省		次年度に向けた具体的な打開策	
<p>「基礎教養入門」では、その冒頭で「学びとは」を担当しているが、大学教育とりわけ本学教育への導入と位置づけ、「建学の精神」から学ぶことにしている。このねらいは、ある程度、うまく伝えることができたと考えている。</p> <p>「総合科目」は、本学において数少ない科学的思考法の修得機会と位置づけているが、うまく伝えられていない。</p>		<p>シラバス記載書式の改訂にともない、テーマの配置を変えた。とくに「総合科目」では、科学的思考法の導入から、最終的には、幼児教育・保育・福祉の実践場面でも有効な論理的な考え方や伝え方を身につけられるよう指導していきたい。</p>	
－学生とのかかわりとしての目標－			
<p>学生個人ごとの授業に向かう姿勢を把握して、それぞれにとって有意義な授業・学生生活であるよう働きかけていきたい。</p>			
今年度の反省		次年度に向けた具体的な打開策	
<p>とくに後期開講の「総合科目」では、実習によって授業の連続性が分断される傾向があり反省される。</p>		<p>実習を含めて学生の年間の履修パターンを把握した上で、学生個人ごとの指導に力を入れていきたい。</p>	

役職	教授	教員名	大木みどり
－授業としての取り組み目標－			
<p>実際の保育・教育活動場면을イメージした取り組みとしてのグループ演習課題については、実習における実践の振り返りを充分に行う中で各自の課題を明確にし、活動内容の計画実践、まとめができるように、内容や進め方について検討していく。</p>			
今年度の反省		次年度に向けた具体的な打開策	
<p>・実習における実践活動の課題を踏まえながら、様々な工夫した活動内容の計画、実践を通して、実践者も体験者も共に学び合えることを目指した。中には対象を高齢者や親子とした活動、アイテムや導入を工夫した活</p>		<p>・授業時間外の予習・復習の時間で、グループ毎の実践活動の計画・準備となっていることもあり、十分な相談の時間が確保できない状況にあることも考えられる。このためさらに十分な共通理解や協力を促</p>	

動等も見られたが、演習活動の計画や実践におけるグループ活動がスムーズに進まないところも見られ、グループ活動の進め方が課題となった。	す丁寧な説明やグループ毎の計画・準備の時間を授業に組み込むこと等の工夫をしていく。
－学生とのかかわりとしての目標－	
今年度も学生への積極的で丁寧な関わりを心がけ、学生自身が学びや様々な活動の主体であることを意識して取り組むことができるような環境作りや関わり、援助の仕方等について工夫していく。	
今年度の反省	次年度に向けた具体的な打開策
<ul style="list-style-type: none"> ・授業・クラス活動・ゼミ活動・サークル活動・様々な行事等において、学生との丁寧な関わりを心がけた。 ・授業・実習を始め、学生自身の主体的な学びの姿勢や活動への関わりを引き出し、育てることのむずかしさを感じる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・引き続き学生との丁寧で積極的な関わり、対話や活動を共にすることを通して、学生自身が考え行動できるような働きかけを行っていきたい。そのためにも気軽に研究室を訪問したり、相談したりできるような環境を整えていく。

役職	専攻科主任・教授	教員名	荒木 隆俊
－授業としての取り組み目標－			
<ul style="list-style-type: none"> ・マニュアル化した専門職者を育てるということではなく、将来に向けて今何が必要か、どんな視点が介護支援に必要なのかといった点に触れ、特に「命・生きる」ということについて考えさせるような授業を心がける。 ・昨年度の反省を活かし、介護福祉士国家試験全員合格を目指し、早い段階から意識を高める努力をしていく。 			
今年度の反省		次年度に向けた具体的な打開策	
<ul style="list-style-type: none"> ・授業については目標に沿った授業を心がけ実施したつもりであるが、理解の程度という点では、個人差が出てしまったようである。適宜授業でも理解しているのかどうか確認の必要性を痛感している。もう少し、わかりやすい授業を進めていくための工夫と努力をすべきであった。 ・介護福祉士国家試験に向けての準備は、昨年度の反省を踏まえ、早い段階から意識づけを行うために、グループによる学習の機会を設けたが、機能しなかった。原因を探り次年度に活かしていく。 		<ul style="list-style-type: none"> ・授業の柱は、今年度と同様に進めていくつもりであるが、理解の程度については、適宜、確認の必要性を感じている。授業の後半で、毎回授業の振り返りとポイントについて、整理を行う時間を設けることを意識したい。 ・介護福祉士国家試験対策としては、グループ構成をいかにして学習機会を多く持てるか、授業以外の時間も教室等に向いて、学生の様子や意見を取り入れながら、確認をしながら見守るようにしていく。 	
－学生とのかかわりとしての目標－			
<ul style="list-style-type: none"> ・個々の学生との「対話」を意識した関わりを継続し、できるだけ多く、個々の学生の良いところを見つけて「誉める・認める」努力をしていく。 			
今年度の反省		次年度に向けた具体的な打開策	
<ul style="list-style-type: none"> ・各生徒は授業・クラス活動・ゼミ・部活動等様々な場面で関わる機会を多く得ることができたことにより、後期は、個々の学生の良いところを確認できた実感が持て、 		<ul style="list-style-type: none"> ・学生が気軽に研究室を訪問したり、相談したりできるような環境を整え、学生個人への丁寧な関わりと共に、様々なクラス活動や行事、サークル活動や委員会 	

適宜、認め励ませたと思う。 ・様々なクラス活動や行事、サークル活動や委員会活動等において、担当学生や中心学生は積極的に活動に参加し勧めてくれたが、それ以外の学生の協力を得ることが難しい場面も見られことが課題である。	活動等が協力的にまた円滑に行われるように、連絡を密にしながら随時相談に乗ったり、自ら出向いたりという姿勢を持つよう努力していく。
--	--

役職	図書館長・教授	教員名	柏倉 弘和
－授業としての取り組み目標－			
教材の工夫は継続して行うが、そのほかに授業の内容をなるべく実践に結びつくように考えていきたい。 学習者が、自分で実践を行う際の、考え方や教材、進め方の手助けになることを取り入れていく。			
今年度の反省		次年度に向けた具体的な打開策	
授業内容と実践との結びつきについては、少しは深めることができたと思う。 実習における実践を教材にすると関心が高い。 グループでの話し合いを取り入れたり、学生の既成概念を打ち砕くような内容を扱うと、学習効果が上がるように感じた。		実習における実践の教材化については、どんな場面を取り上げるか、しっかりと意図を持って選択する。 グループ討議を取り入れたり、資料の中に書き込む部分を設けたり、学生が自分で考えやすいような工夫をする。	
－学生とのかかわりとしての目標－			
学生の皆さんと様々な場面で話をするだけでなく、一緒に活動していくことを心がけ、そういう機会をたくさん作っていきたい。			
今年度の反省		次年度に向けた具体的な打開策	
授業の中ではある程度かかわることはできているが、それ以外の場面でのかかわりは十分とは言えない。もっと話をする機会を作っていきたい。		ゼミの学生や実習巡回担当の学生を通して、他の学生とのかかわりを増やしていく。	

役職	教授	教員名	高橋 寛
－授業としての取り組み目標－			
教員の言葉、歌声、ピアノの演奏などのアナログな「耳からの情報」に注意を向けさせ、「聴き取る、書き取る、記憶に残す」という作業を必要とするような教材を更に改案し、そのような授業の進め方を充実させる。 これを指向することは、担当教科以外の学生指導という側面にも有効であるはずだ。本学の卒業生たちの就職			

先から『ピアノをもっと弾けるようになってきて欲しい』との意見が多く寄せられている昨今、ピアノの授業のあり方についても、担当の教員たちと協議して新たな指導方法を早急に確立する必要があると感じている。「歌うだけ」「ピアノを弾くだけ」のスキルでは、幼児教育の現場では適応できない。スキル・アップすることの喜びを実感できる授業の実施に努める。

今年度の反省	次年度に向けた具体的な打開策
<ul style="list-style-type: none"> ・ 学生数の減少に伴い、演習の内容が濃くできたように思う。 ・ 昨年よりも学生たちのレポートの書き方が丁寧になった。反面、文章は稚拙さが目立つようになってきている。 ・ ピアノや歌唱の技術・能力の差が、学生間で広がっている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 学生の音楽的能力の向上と、学生間の能力差を埋める方法を考えなければならない。 ・ 器楽担当の教員たちとの連携して、解決策を模索したい。 ・ レポートには、これまで以上に添削・指導を加えて、文章力の向上に助力したい。

－学生とのかかわりとしての目標－

学生たちにとっての「もっとも身近な社会人」としての立場をこれまで同様に重視し、適度な礼節は確保しつつ「高圧的な教師でもなく、我関せずの大人でもない」ことを基本のスタンスとしたい。

また、舞台に立ち続けるプロの現役（歌手・役者・演出家・合唱指揮者・・・）として、日常の体調管理や、あるべき対外との交渉術などを、機会あるたびに学生に公開し、または企画への参加・共演を促し、よき見本となるように努める。

フットワークを軽く、思考を柔軟に、精神は実直に、大人としても「人生を前進する」姿勢を示していきたい。

今年度の反省	次年度に向けた具体的な打開策
<ul style="list-style-type: none"> ・ 私的な解釈を加えて、教員からのメッセージを捻じ曲げる学生が増えつつあるように思う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 丹念に話を伝え、内容をメモさせて「伝達した」という形を徹底するほかないと思われる。

役職	教授	教員名	高桑 秀郎
－授業としての取り組み目標－			
<ul style="list-style-type: none"> ・ 保育内容研究「健康」について、保育指針や教育要領の改訂に対応した内容に改善していく。 ・ 「何故、そのような対応、支援・援助を行うのか」という部分についての理解が進められるよう説明を今まで以上に丁寧に行う。 ・ 特に2年後期の授業において、安易な欠席が増えないよう働きかける。（授業の3分の2以上の出席はあくまでも、成績判定を行う最低基準であり、内容によっては不合格もありうることを伝える。 			

今年度の反省	次年度に向けた具体的な打開策
<ul style="list-style-type: none"> ・授業内容については、改定後の保育指針・教育要領に対応した内容について、取り上げることができた。 ・再試対象者が多く出た。対応、支援についての説明が浅いものも多く、試験に対する準備をしてきていないと感じられる答案が例年になく多く見られた。もしかして一年次後期の試験を経験して甘く考えられたのかもしれない。 ・授業出席については、厳密に行った。2年次後期の欠席については、自分の授業においては、例年より少ないように感じた。しかし、1年次学生の欠席・遅刻が多く見られ、今後の学生生活そのものが心配される学生が何名かいた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・授業については、出席のみならず、良好な学習環境を保てるよう配慮していく。欠席が増えてきた者については、早めの連絡と同時に教務課と協力して指導を進めたい。遅刻者に対しては理由を聞いた上で、理由に応じた対応を取っていく。 ・文章の稚拙さの問題はあるが、主旨の説明と何を問うているのかの説明は丁寧に行っていく。試験前に夏休みがあるが、準備を進めておくよう、改めて伝える。 ・1年次学生には2年間の中での学生生活について、折々に問うていきたい。

—学生とのかかわりとしての目標—

- ・注意を行う際は、こちら側からの一方的な指導にならないように、学生の言い分も聞くよう配慮する。
- ・就職指導について丁寧に行う。
- ・SNSなどを利用しながら、担任として、学生への情報提供をまめに行う。

今年度の反省	次年度に向けた具体的な打開策
<ul style="list-style-type: none"> ・学生の言い分も聞きながら進めながら行ったが、あまりに自分本位な言い訳が多く、そのことについて改めて厳しく指導する機会が多かった。(学生自身が自分のミスであることは認めながら謝らず、自分の正当性ばかり主張するような場合)。 ・就職指導については、相談しに来る学生には丁寧に説明を行ったが、伝わっていない部分も多く感じた。 ・事前に情報は配信するよう心がけた。ホームルームなどの出席率は良かったので成果はあったと思う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・学生指導については今年度、同様に進める。 ・就職指導については、自分の価値観のみでなく、多様な価値観、ものの見方ができるよう訴えていく。 ・利用していた SNS がサービスを停止するので新しい SNS を利用して、学生との連絡の利便性を上げたい。

役職	学生部長・教授	教員名	松田 知明
—授業としての取り組み目標—			
<ul style="list-style-type: none"> ・授業の理解を確認することを心がけて、その結果を配布資料の改善などについて、授業後のフィードバックの方法も含め検討し、実施していきたい。 			

今年度の反省	次年度に向けた具体的な打開策
<ul style="list-style-type: none"> ・毎回提出されたレポートから、授業の理解を確認し、次回の授業で補足説明や追加資料を配布することができた。その対応のために授業計画を修正する点もあったことから、その結果を来年度の授業に反映させたい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・来年度から、カリキュラムの変更により授業内容の変更もあることから、本年度に継続して、授業の理解を確認することに努める。
－学生とのかかわりとしての目標－	
<ul style="list-style-type: none"> ・就職活動を円滑に進めたり、就職後に速やかに職場に適応できるようになるなど、学生とのコミュニケーションを深め、適切な支援ができるようにしたい。 ・学生会として、学生がけじめある生活ができるよう指導の重点目標を立て、指導することから、それらの指導が効果的に行われるよう検討し、実施していきたい。 	
今年度の反省	次年度に向けた具体的な打開策
<ul style="list-style-type: none"> ・学生とのコミュニケーションを深め、適切な支援ができるように心がけたが、繁忙な時期には十分対応できなかったことから、仕事の配分と効率化を図り、適切な支援ができるよう心掛けたい。 ・学生がけじめある生活ができるよう指導の重点目標を立てたが、自分自身けじめある生活を過ごすことができない場面も多いことから、仕事の配分と効率化を図り、けじめある生活になるよう心掛けたい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・仕事の配分と効率化を図り、学生への支援の時間を確保するように努めたい。

役職	准教授	教員名	小林 浩子
－授業としての取り組み目標－			
英語（外国語）は、自力で辞書等を使って試行錯誤するなかで、日本語にはない英語特有の思考方法や文化的・歴史的背景にまでふれることができる科目なので、安易に翻訳機等の他力を使い日本語訳結果だけを得意とするのではなく、地道に辞書を使って訳し、さらにより日本語的な言い回しに翻訳することを学生に課していきたい。			
今年度の反省	次年度に向けた具体的な打開策		
ほとんどの学生が辞書を使用しての英文和訳、英文法の復習に頑張っており取り組んでいた。特に訓練生達は授業中や終了後に毎回わからないところを質問するなど、授業態度が良く、定期試験結果にもその成果が現れた。訓練生の熱心さに、そのクラスの学生が良い影響を受けていたようである。	学生に地道に辞書を使用して和訳させる、英文法等をわかりやすく教え直すことを引き続き行っていきたい。		

<p>他クラスで2～3名、注意しても授業中の私語や居眠りが直らない学生がいた。</p> <p>中学生の段階で英語がわからなくなり、それを放置した結果ますますやる気をなくしているとのこと。こういう学生にどう対処していくかが今後の課題と思われる。</p>	
<p>—学生とのかかわりとしての目標—</p>	
<p>今なぜそれをするのか、今なぜそれをしてはいけないのか…英語の授業に限らず、他の授業や学生生活にも共通することだが、威圧的に禁止するのではなく、学生がその理由を理解でき、行動に移せるような指導方法を考えて実施したい。</p>	
<p>今年度の反省</p>	<p>次年度に向けた具体的な打開策</p>
<p>授業中は学生達にできるだけ個別に声がけをし、時間をかけて問いかけたり質問に答えることをした。</p> <p>結果、英語が苦手と言っていた学生たちが定期試験で良い成果を出せた。</p>	<p>引き続き、学生達へのこまめな声掛けをしていきたい。</p>

<p>役職</p>	<p>准教授</p>	<p>教員名</p>	<p>松田 水月</p>
<p>—授業としての取り組み目標—</p>			
<p>人と関わる仕事の一つである介護福祉士の専門性とは何かを常に考えた授業にしていく。その中で、国家試験を意識した授業に心がけ、学生が今何に対して悩み、考えているかを視野に置き、その課題に応じた授業に心がける。</p>			
<p>今年度の反省</p>		<p>次年度に向けた具体的な打開策</p>	
<p>自分の教科は、特に興味や関心を持ち学習を重ねないと試験の点数はとれない分野となっている。まずそのことを学生に認識させ、基本・応用を徹底的に行った。始まった当初は、なぜ大切なのか、どこがおもしろいのか分らず、停滞していたが、後期からは集中力が高まっていく姿勢が感じられた。</p> <p>全体的に各個人が何に困って、どこが問題なのかを把握し、個人ごと具体的な個別受験プラン形式の必要性を感じた。</p>		<ul style="list-style-type: none"> ・どの講義においても、介護福祉士国家試験と繋がるよう、なぜ保育や介護に医療的な知識、根拠、技術が必要とされているのか、学生の反応や新しい情報等を常に意識し、理解しやすい学習になるよう心がけたい。 ・学内生活だけでなく、保育・介護どちらに進んでも、次年度社会人として生活していかなければならない。よって、学習だけにとどまらず、今何をすべきか常に考え、目標を持ちながら学習できるような環境づくりに努めたい。 	
<p>—学生とのかかわりとしての目標—</p>			
<p>介護福祉士国家試験ばかりにとらわれず、一人の専門職としての介護福祉士になるために必要なのは、人と関わり利用者のニーズを考えながら支援していくこと。国家試験で勉強することはその支援のための道具の</p>			

一つであること。などを伝えながら個々人とのかかわりを多く持ち一人ひとりの日からを伸ばしていきたい	
今年度の反省	次年度に向けた具体的な打開策
1年で国家試験を受けなければならないということから、どうしても介護福祉士国家試験が前面に出てしまい、学生生活での不安等を真の部分まで理解することが出来たのか疑問。	1年という短期間で、実習・就職活動・国家試験勉強と追われるように時が過ぎていき、不安・悩みなど多く抱えることもあると思われる。 それらの軽減のためにも学生をよく観察し関わりを多く持ち、早期から学生を受容し理解に努めたい。

役職	学科長・教授	教員名	太田 裕子
－授業としての取り組み目標－			
<ul style="list-style-type: none"> ・学習内容の理解と定着、学習内容の保育との繋がり理解促進を目指し、具体例提示等の工夫を施しながら、授業を実施する。 ・学生の提出物に対して助言等を書き込み返却することで、学生の適切な現状把握やより能動的な授業態度に繋がっていききたい。 			
今年度の反省		次年度に向けた具体的な打開策	
<ul style="list-style-type: none"> ・学習内容の理解については一定の定着ができたように思うが、納得を伴う理解の定着は達成できていない。また、保育との繋がり理解を明確に促進することは難しかったと感じている。 ・学生の提出物に目を通すことで、学生の学修状況についての一定の把握はできていたように思う。助言等の書き込みに関しては、記述実施が難しい時期があった。 		<ul style="list-style-type: none"> ・学修内容を理解することに加え、納得を伴って理解したり保育との関連性を理解したりすることは難しいことだが、保育現場における具体的な事例を提示する等の工夫により、それらの促進実現に努めたい。 ・講義形式の授業では学生が受け身になる傾向が強いことから、学生の提出物に対して助言等を書き込み返却する等の個別対応は必要なものとの認識が依然として強い。年間を通しての実施は難しい面もあるが、極力実現していきたい。 	
－学生とのかかわりとしての目標－			
<ul style="list-style-type: none"> ・学生が人と接することの楽しさや安心感を持てるよう、各学生の個性や現状に合わせた一人ひとりとの関わりを重視する。希望の進路決定を実現できるよう、過去の学生の取り組みを紹介する等しながら、これまでの経験を活かした支援をしていきたい。 			
今年度の反省		次年度に向けた具体的な打開策	
<ul style="list-style-type: none"> ・出来る範囲で学生と関わりを持ち、学生生活における不安や悩みに共感したり、打開策について共に考えたりする等の努力はしたと思う。また、進路決定につ 		<ul style="list-style-type: none"> ・学生が安心して充実した学生生活を送るためには、個別な関わり的重要性、有効性は大きいと実感していることから、引き続き、できる限り細やかな 	

<p>いて悩む学生の支援も実施できたと考えている。しかし、時間の捻出に難しい面もあり、前年度と比較すると学生と関わる時間が減少した。学生とかかわる機会と時間を確保することを普段からより強く意識化する必要がある。</p>	<p>関わりを心がけていきたい。積極的な学生、消極的な学生など様々な学生がいることを念頭に置き、困り感のある学生へも配慮しながら、それぞれの学生が必要とするかかわりをしていきたい。進路決定に関しては、それぞれの希望、事情があることを考慮した上で希望の進路決定実現に向けて支援していく。</p> <p>・業務の効率化を図り、学生とかかわる機会、時間を確保するようにする。</p>
---	--

<p>役職</p>	<p>准教授</p>	<p>教員名</p>	<p>花田 嘉雄</p>
<p align="center">－授業としての取り組み目標－</p>			
<p>・学生個々の良い点や個性的な発想を見つけたら、その場で褒めるように心掛ける。また、色々な表現や価値観を受け入れ、他の作品にも興味を持てるように、鑑賞や発表の方法を工夫する。</p>			
<p align="center">今年度の反省</p>		<p align="center">次年度に向けた具体的な打開策</p>	
<p>・学生の良い点や個性的な発想について頃合いを図りながら褒めるようにしているが、良い言葉が思い浮かばずにタイミングを逃す場面もあった。</p> <p>・学生の発表の場面では、発表しやすい環境づくりを心掛けた。鑑賞の場面では、もう少し他者の作品の良さを紹介する場面があっても良いと感じた。</p>		<p>・普段から褒め言葉の語彙数を増やすように意識し、すぐに出せるように心の準備をしておく。</p> <p>・他者の作品等を鑑賞する際に、学生に気づいてほしい点を伝えることに留めるのではなく、面白い点などを具体的に伝えるようにする。</p>	
<p align="center">－学生とのかかわりとしての目標－</p>			
<p>・時と場合、人間関係によって言葉を遣い分けるよう声掛けする。また、自分自身の言葉遣いについても、気楽過ぎないように気をつける。</p> <p>・頃合いを見ながら、学生が自ら考え、責任を持って行動できるような働きかけをする。</p>			
<p align="center">今年度の反省</p>		<p align="center">次年度に向けた具体的な打開策</p>	
<p>・他の教職員の話をする時は敬称をつけるよう心掛けているが、自分への対応が甘くなっているので気を付けるようにしたい。</p> <p>・実習に臨む姿勢や、提出物のルーズさの目立つ学生に対しての対応が後手後手になっているので、けじめをつけられるような工夫が必要である。</p>		<p>・社会に出てから通用しない可能性のある言葉遣い等については、頃合いを見ながら指摘するようになる。</p> <p>・最終の提出期限を守らせるようにルール付けをし、守れなかったらどうなるのかを明確に伝えるようにする。</p>	

役 職	准教授	教員名	大関 嘉成
－授業としての取り組み目標－			
<ul style="list-style-type: none"> ・専門的な内容の伝達に合わせ、特に実習場面における事例紹介を充実させることで、専門用語等の理解を促す。そして実習後は、学生のような経験則を可視化させ、専門用語等を使って説明させる課題を行うことで、現象を専門的に観ようとする構えを身に着けられるようにする。 			
今年度の反省		次年度に向けた具体的な打開策	
<p>後期の授業においてではあるが、タームの紹介に合わせ、経験したと思われる実習場面や次年度経験するであろう実習場面、さらに日常生活場면을事例としてできるだけ紹介した。</p> <p>課題においては、「専門用語→事例」として記述する課題、逆に「事例→専門用語」として記述する課題を設定したが、前者は調べながら専門用語を理解した上で説明できるとしても、後者は解答が困難であった。</p>		<p>講義・演習に関わらず、ワークシート等を用いて、知のアウトプットは継続して毎時課していきたい。問題はアウトプットさせる知の質である。専門用語の理解に関しては、適切な事例を用いて説明できていれば概ねその確認ができるが、さらに、理解した理論の実践というスタイルでのアウトプット、また、現実の事象を理論に基づき考察するというスタイルでのアウトプットを求めたい。教室場面で現実的に行うことを考えると、保育場面に少なからず遭遇した実習後に、経験則を創り出すことをその事例として用いながら、帰納する方向での思考の型を提示することで、事象を理論に基づき考察する視点を身につけさせたい。</p>	
－学生とのかかわりとしての目標－			
<ul style="list-style-type: none"> ・スマートフォンのアプリに関する理解に努め、学生と共にそのツールとしての扱い方を模索する。 ・提出物の期限や物事を進める見通しなどを「マイデッドライン」を積極的に設定しながら行えるよう支援する。 			
今年度の反省		次年度に向けた具体的な打開策	
<p>特に、「Instagram」においては、他者を被写体として個人的に撮影したものをストーリーとしてあげる行為が散見された。確認されたその都度、一人一人に指摘することを心がけた。ストーリー機能が備わってから、安易に肖像権の侵害が行われているように感じる。過去、トラブルになった事例をあげながら、授業でも SNS の使い方を提案した。</p> <p>教員側が細やかに「マイデッドライン」を設定すれば、学生はほぼ忠実に遂行してくれた。しかし、自らその設定が行えるようになったかは確認できなかった。</p>		<p>すでに過去の言葉と化しているであろう「ネチケット」や「ネットリテラシー」であるが、新入生が入学してくる度、継続して伝えていきたい。またここ数年、ゲームアプリへの重課金者も見られるようになっていくことから、その依存例と共に、幼児の youtube 視聴問題等、子育て事例も含めて伝えたい。</p> <p>「マイデッドライン」の設定の仕方をその意義と共に伝える。そして、機会あるごとに、どのような見通しで物事に取り組んでいるのか、その見通しを問うていきたい。</p>	

役職	講師	教員名	樋口 健介
－授業としての取り組み目標－			
<ul style="list-style-type: none"> ・ 図画工作（一年次）については、継続してものづくりが楽しいと思える授業を目指していく。作品集（スケッチブック）が保育案での参考になり、学びの記録になるように改善していく。 ・ 図画工作Ⅱ（二年次）については、活動の記録を学生自身が気軽に取っていきけるような仕組みを考えたい。 ・ 保育実践研究Ⅱについては、焦点を絞り、改善案が考えやすい記録方法を考えていきたい。特に学生が活動を振り返り、改善案を考えられることに重点を置きたい。 			
今年度の反省		次年度に向けた具体的な打開策	
<ul style="list-style-type: none"> ・ ものづくりの苦手意識の軽減はできているようである。作品や資料をスケッチブックにまとめる際に学生自身の考えや保育を行う視点などが現れる工夫が足りないと考える。 ・ 学生は自分自身が制作したものをスマートフォンで撮影して記録している。写真を気軽に印刷する環境を整えることで、写真記録に対して自分なりの考えや保育観を付加するポートフォリオの作成につなげたい。 ・ 学生が経験から学ぶ授業になってきていると考える。実践、記録、発表、改善のサイクルを回し、発表を学生間で相互に評価させたことで、今年度は記録の作成能力、発表の能力が明らかに伸びる学生がいたと考える。 		<ul style="list-style-type: none"> ・ スマートフォンで撮影した写真を印刷するプリンターを図工室に設置することを検討する。 ・ 経験を記録し、他者との共有を通して学びにつなげる仕組みづくりをする。まずは、学生にとって、面白い！と思える経験を授業の中で作っていく。 	
－学生とのかかわりとしての目標－			
<ul style="list-style-type: none"> ・ 自分と学生のかかわりが少しでも学生の学びや自主性につながるように日常的に心がける。 ・ 学生が様々な学外の人と関われる機会を作っていきたい。 			
今年度の反省		次年度に向けた具体的な打開策	
<ul style="list-style-type: none"> ・ 学外での取り組みに参加する学生を集めるのが難しくなっている。授業の中で学外の人と関われる機会ができると課外活動の意欲も上がるのかもしれないと考える。 		<ul style="list-style-type: none"> ・ 余裕を持って学生と関われるように、授業や業務を計画的に整理する必要がある。 	

役職	講師	教員名	宮地 康子
－授業としての取り組み目標－			
<p>入学前に実施した過去問の課題を用いて、春休み中の学習の方法を確認し、4月からの自己学習へと繋がるような指導を行っていく。</p> <p>学習方法に悩んでいる学生に対しては、早期に声をかけ、早めに自己学習にとりかかることができるように促していく。</p>			

<p>また、個別に指導が必要な学生に対してはコミュニケーションを充分とるように心がけ、学習意欲に結びつけることができるようにする</p>	
<p>今年度の反省</p>	<p>次年度に向けた具体的な打開策</p>
<p>国家試験対策として、毎日多くの課題へ取り組みを促し、定期的に模擬問題を解くこと等の実施によって学習成果が目に見え、後期には学習意欲の向上へと繋がったのではないかと思います。しかし、主体的な学習への習慣づけには時間がかかったため、具体的な目標の提示や個人への働きかけを早期から実施していく必要があったと考える。</p>	<p>学生の理解度や学習の進行度が異なるため、学生一人ひとり状況を把握し、教員間で共有を図る。</p> <p>また、使用する参考書等や課題、配布物等を教員間で検討し、前年度の反省を活かし、段階に合わせた学習ができるように配慮する。</p>
<p>－学生とのかかわりとしての目標－</p>	
<p>学生一人ひとりとのコミュニケーションを大事にし、学生の生活や健康状態、精神状態等を把握するように心がける。</p> <p>生活態度については、全体に早い段階から声をかけるようにし、さらに個別に対応が必要な学生に対しては、粘り強く指導する。</p> <p>また、国家試験に向けてクラス全体で目標を達成できるように、クラス運営にも力を入れていく。</p>	
<p>今年度の反省</p>	<p>次年度に向けた具体的な打開策</p>
<p>学生一人ひとりに目を向け、コミュニケーションを図るよう心掛けた。しかし、社会人に必要なマナーやスキル（報告、相談、連絡等）が不足していると思われる学生へその都度働きかけに努めたが、なかなか習慣づかない学生も多かった。また、クラス全体で国試対策への取り組みに関しては学級委員だけでなくグループ学習のリーダーの役割を持ってもらうことで、個人学習だけでなく、全体としての士気を高めることに繋がったと思うが、さらに早い時期での介入が必要であったと思う。</p>	<p>学生の学習面だけでなく、生活面等の把握もコミュニケーションを積極的に図り、適宜指導を行っていく。</p> <p>個人学習だけでなく、クラス全体の士気を高めることができるように、入学後早い段階で働きかけていく。</p>

<p>役職</p>	<p>講師</p>	<p>教員名</p>	<p>伊藤 和雄</p>
<p>－授業としての取り組み目標－</p>			
<ul style="list-style-type: none"> ・幼児教育においても介護を学ぶことの重要性、必要性を感じる授業を心掛ける。 ・専攻科においては介護福祉士国家試験受験対策を視野にいたれた授業を展開し、全員合格を目指す。 			
<p>今年度の反省</p>		<p>次年度に向けた具体的な打開策</p>	
<ul style="list-style-type: none"> ・介護、福祉を学ぶ意義や重要性を感じられる工夫がたりなかった。 ・介護福祉士国家試験の自己採点において、合格点に 		<ul style="list-style-type: none"> ・保育施設、高齢者福祉施設の複合施設の増加、互いの交流においてどのようなメリットがあるのかを事例等をとおして工夫す 	

<p>達しない学生がおり全員合格とはいかなかった。</p>	<p>る。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・個人の状況をは把握し、何が理解できないか、できていないかを授業後のプリントや模擬試験結果等をふまえて確認をする。
<p>－学生とのかかわりとしての目標－</p>	
<ul style="list-style-type: none"> ・学生が今現在、何に悩み、どのようなアドバイスを求めているのかを意識しコミュニケーションを図るようにする。 ・社会人として、専門職人として何が大事かを考える、意識できる、理解でき、報連相が身につくような関わり方を図る。 	
<p>今年度の反省</p>	<p>次年度に向けた具体的な打開策</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・かかわりの多い学生とそうでない学生との差が大きかった。 ・なぜ、報告・連絡・相談が大切なのかのなぜの部分が多分に伝わらなかった。 	<ul style="list-style-type: none"> ・授業だけでなく、ゼミ、サークル、委員会等とおして多くの学生と積極的にかかわりを持ちコミュニケーションを図る。 ・報告・連絡・相談の大切さを、その時々イメージしやすい事例等も含めて コミュニケーションを図る。

<p>役職</p>	<p>講師</p>	<p>教員名</p>	<p>白崎 直季</p>
<p>－授業としての取り組み目標－</p>			
<ul style="list-style-type: none"> ・楽器に弾くことの楽しさを感じてもらい、曲のレパートリーを少しずつ増やしていけるようにする。 ・音楽の基礎的な内容である楽譜の読み方などを、わかりやすく伝えられるようにする。 			
<p>今年度の反省</p>		<p>次年度に向けた具体的な打開策</p>	
<p>今年度から読譜の基本的な部分であるリズム練習を反復して行った。なるべく見やすい資料を配付することで、苦手意識を持たせないよう心掛けた。しかし、この基礎的な部分とピアノの演奏というところの応用につながっていかない様子がみられた。また、練習が思うようにできない学生に関して、空き時間に補習を行うこともしたが、時間が限られてくるため、主体的に学修する環境を作っていきたい。</p>		<p>昨年度に行った基礎的な部分を継続してやっていきたい。反復練習をすることで、効果が得られるのではないかと考える。また、その基礎的な部分と実際に弾くというところを結びつかせるために、なるべくわかりやすい例を提示できるように心がけていきたい。また、非常勤の先生と連携をはかり、練習が思うようにできない学生に対して、早めにフォローをしていくことに取り組んでいきたい。</p>	
<p>－学生とのかかわりとしての目標－</p>			
<ul style="list-style-type: none"> ・クラスにおいて就職活動が始まるため、情報や準備に関する指導を丁寧に行っていく。 ・端末を使ったコミュニケーションだけでなく、学生と直接会話を交わす機会を増やしていく。 ・基本的な挨拶をしていけるように促す。 			

今年度の反省	次年度に向けた具体的な打開策
<p>就職指導に関して、比較的早めに準備することができた。また、こまめに声をかけていくことで、色々な面でのコミュニケーションを図っていくことができたと感じる。</p>	<p>就職活動に関して不安を感じている学生がいたため、安心させると同時に園の様子などをなるべく伝達できるよう情報を集められるようにしたい。また、普段の何気ないコミュニケーションを大切にしていきたい。</p>

平成30年度 卒業時満足度調査

() は昨年度の値

問①				問②				問③							
答	人数	%		答	人数	%		答	人数	%					
短大の施設、設備、備品の充実度について	非常に満足	30	25.0% (21.1%)	短大の施設、設備、備品の使いやすさについて	非常に満足	29	24.2% (22.8%)	短大の授業、教育課程全般について	非常に満足	37	30.8% (36.6%)				
	やや満足	76	63.3% (55.3%)		やや満足	80	66.7% (59.3%)		やや満足	81	67.5% (61.8%)				
	やや不満	12	10.0% (23.6%)		やや不満	9	7.5% (17.9%)		やや不満	1	0.8% (1.6%)				
	全く不満	1	0.8% (0.0%)		全く不満	1	1% (0.0%)		全く不満	0	0% (0.0%)				
平均	3.13 (3.05)	(無回答)	0	0%	平均	3.15 (3.12)	(無回答)	0	0%	平均	3.30 (3.34)	(無回答)	0	0%	
問④				問⑤				問⑥							
専任教員の授業について	非常に満足	47	39.2% (52.0%)	非常勤教員の授業について	非常に満足	27	22.5% (34.1%)	ゼミ活動とゼミ指導教員の指導について	非常に満足	61	50.8% (56.9%)				
	やや満足	69	57.5% (44.7%)		やや満足	73	60.8% (53.7%)		やや満足	53	44.2% (39.0%)				
	やや不満	3	3% (3.3%)		やや不満	18	15.0% (12.2%)		やや不満	4	3.3% (3.3%)				
	全く不満	0	0% (0%)		全く不満	1	1% (0.0%)		全く不満	1	0.8% (0.0%)				
平均	3.37 (3.48)	(無回答)	0	0%	平均	3.06 (3.13)	(無回答)	0	0%	平均	3.46 (3.52)	(無回答)	0	0%	
問⑦				問⑧				問⑨							
クラス担任の指導について	非常に満足	51	42.5% (50.4%)	事務室職員の応対全般について	非常に満足	63	52.5% (53.7%)	学校行事について	非常に満足	51	42.5% (44.7%)				
	やや満足	48	40.0% (43.1%)		やや満足	55	45.8% (42.3%)		やや満足	64	53.3% (51.2%)				
	やや不満	9	7.5% (5.7%)		やや不満	1	1% (4.1%)		やや不満	4	3.3% (4.1%)				
	全く不満	10	8.3% (0.8%)		全く不満	0	0% (0%)		全く不満	0	0% (0.0%)				
平均	3.19 (3.71)	(無回答)	1	1%	平均	3.52 (3.63)	(無回答)	0	0%	平均	3.39 (3.22)	(無回答)	0	0%	
問⑩				問⑪				問⑫							
授業以外の課外活動について	非常に満足	42	35.0% (41.5%)	自分の専門職としての技能の向上について	非常に満足	43	35.8% (39.8%)	2年間(もしくは3年間)の自分の過ごし方や成長について	非常に満足	50	41.7% (44.7%)				
	やや満足	72	60.0% (54.5%)		やや満足	71	59.2% (52.8%)		やや満足	66	55.0% (48.0%)				
	やや不満	4	3.3% (3.3%)		やや不満	5	4.2% (6.5%)		やや不満	3	2.5% (7.3%)				
	全く不満	1	0.8% (0.0%)		全く不満	0	0% (0.0%)		全く不満	0	0% (0.0%)				
平均	3.30 (3.33)	(無回答)	0	0%	平均	3.32 (3.39)	(無回答)	0	0%	平均	3.39 (3.42)	(無回答)	0	0%	
問⑬				問⑭				問⑮							
友人たちとの出会いについて	非常に満足	87	72.5% (70.7%)	教員との授業以外での関わりについて	非常に満足	63	52.5% (61.0%)	事務職員との関わりについて	非常に満足	50	41.7% (51.2%)				
	やや満足	29	24.2% (29.3%)		やや満足	55	45.8% (35.8%)		やや満足	66	55.0% (45.5%)				
	やや不満	3	2.5% (0.0%)		やや不満	1	1% (3.3%)		やや不満	3	2.5% (3.3%)				
	全く不満	0	0% (0.6%)		全く不満	0	0% (0%)		全く不満	0	0% (0.0%)				
平均	3.71 (3.58)	(無回答)	0	0%	平均	3.52 (3.60)	(無回答)	0	0%	平均	3.39 (3.43)	(無回答)	0	0%	
問⑯				問⑰				問⑱							
就職活動への支援について	非常に満足	50	41.7% (51.2%)	トラブルを抱えた際の教職員の緊急時の対応について	非常に満足	41	34.2% (54.5%)	学生生活全般について	非常に満足	60	50.0% (50.4%)				
	やや満足	66	55.0% (43.9%)		やや満足	74	61.7% (42.3%)		やや満足	59	49.2% (47.2%)				
	やや不満	3	3% (4.9%)		やや不満	2	1.7% (3.3%)		やや不満	0	0% (1.6%)				
	全く不満	0	0% (0.0%)		全く不満	2	2% (0.0%)		全く不満	0	0% (0.0%)				
平均	3.39 (3.60)	(無回答)	0	0%	平均	3.29 (3.54)	(無回答)	0	0%	平均	3.50 (3.54)	(無回答)	0	0%	
問⑲				問⑳				問㉑							
日常を過ごす環境としての短大について	非常に満足	60	50.0% (48.0%)	羽陽学園短期大学に入学したこと自体を今、どう感じているか	非常に満足	78	65.0% (65.0%)	自身の学生生活を点数化すると100点満点で何点か?	90~100	64	56.1% (56.0%)				
	やや満足	55	45.8% (48.0%)		やや満足	40	33.3% (33.3%)		80~89	27	23.7% (19.8%)				
	やや不満	4	3.3% (3.3%)		やや不満	1	1% (1.6%)		70~79	15	13.2% (13.8%)				
	全く不満	0	0% (0.8%)		全く不満	0	0% (0.0%)		60~69	11	9.6% (6.9%)				
平均	3.47 (3.50)	(無回答)	0	0%	平均	3.65 (3.63)	(無回答)	0	0%	平均	85.1 (84.6)	N=114, SD=0.61	~59	2	1.8% (3.4%)

※平均は「非常に満足」を「4」、「やや満足」を「3」、「やや不満」を「2」、「全く不満」を「1」として算出。

調査は2019年3月14日、各クラスの担任教員により実施された。(協力者:119名)

作成 学内FD担当(2019/03/14)

○卒業時満足度調査 自由記述

◇羽陽短大で特に評価したい点	◇学校側にもっと努力や改善を求める点
<ul style="list-style-type: none"> ・先生と学生の距離がとても近く、楽しく大学生生活を送ることができた。 ・ただただ楽しかった。クラスの仲が良かった。 ・全部楽しかった。毎日楽しく過ごせた。他 5 ・居心地が良い。 ・まず先生との距離！。事務の方とも相談が何でも話しやすく、気軽に相談できる。授業面でも丁寧に教えて下さる先生がたくさんいた。実習中も親身に来てくれた。 ・みんな優しい。 ・先生と学生の距離がすごく近いこと！。他 3 ・ピアノ室が多く、練習に集中できる環境であった。 ・Wi-Fi が付いた。図書館に DVD があるのが、とても良い。他 1 ・事務の方が面白い。 ・楽しい！！。事務の方の“神対応” ・芝生がある。 ・アットホームな空間。 ・昼休みに電子レンジや TV を見ることができる。ピアノがきれい。 ・先生が楽しい。 ・先生との距離が近く、仲が良く、相談などしやすい。 ・楽しく生活できた。先生方に気軽に相談しやすく、よく相談にのってくれた。 ・自由な感じが良かった。 ・とても過ごしやすかった。 ・教師と学生の距離感。友人のノリ。 ・先生方が親身になってくれるところ。ピアノ。 ・専任教員が優しく、親しみやすい。一人一人がピアノを使える。 ・先生が優しい。ピアノのレッスン室。Wi-Fi がある。 ・先生好き。 ・仲が良い。自由。 ・先生大好き。 ・ユーモアがとてもあり、とても楽しい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・自販機をもう少し良いものにしてほしい。 ・学食が欲しい。他 5 ・アイスを販売してほしい。他 4 ・アイス、カップラーメンを販売してほしい。絶対売れるはず。 ・床暖が欲しい。 ・担任がクラスに無関心。 ・担任の関わり方。 ・寒いので、各教室の暖房をもう少し早くつけるなどの対応をしてほしい。掃除の時間をもう少し増やしてもよいと思う。大学が汚い。 ・非常勤講師の質、外部講師講話の内容、掃除 ・掃除（トイレ）他 3 ・暖房調節 ・授業が始まる前に教室をもっと暖めてほしい。学生ホールを広く、学食をつくって欲しい。 ・トイレが汚い。夏暑く、冬めっちゃ寒い。 ・トイレが臭い。 ・トイレが汚い、ピアノ室が寒い。 ・教室が汚いときがある。 ・売店 ・委託寮ならもっとちゃんとしてほしい。 ・自販機の種類をもっと増やしてほしい。 ・受験の難易度を上げてほしい。 ・環境を良くしてほしい（学食、冷暖房、道が狭い。交通の便） ・大きいサイズのカップラーメンを売ってほしい。Wi-Fi を学内全部に付けてほしい。 ・イチゴミルクがほしい。 ・温かい飲み物をもう少し期間を長くしてほしい。 ・備品が古い。PC の時代じゃない、スマホ世代にあった環境を整えてほしい。 ・寒い学校。パソコン遅い。 ・学食がほしい。学生ホールが狭い。 ・専攻科だけの授業の時でも体育館を開けてほしい。

学習成果等アンケート集計結果(幼児教育科1年次)

1学部

平成30年12月実施

【1】あなたが本学への入学を決定された理由を強い順に3つ下記から選んでマークしてください。

	第一理由	第二理由	第三理由
1. 建学の理念に共感したから	2	0	1
2. 入試科目があっていたから	0	1	2
3. 自分の学力にあっていたから	2	1	11
4. 学びたい学部・学科・コースがあったから	35	16	7
5. カリキュラムが充実しているから	5	5	6
6. 資格を取得出来るから	19	33	11
7. 就職に役立つから	3	7	12
8. キャンパスの施設・設備が良いから	1	1	5
9. 地元の大学だから	1	5	11
10. 大学の知名度が高かったから	0	0	0
11. 大学が設置されている地域に魅力があるから	0	0	0
12. 学費が安いから	1	0	1
13. 親や教員に勧められたから	3	5	8
14. 本学しか合格しなかったから	1	0	0
15. その他	2	1	0

「第一理由」「第二理由」「第三理由」それぞれの回答数を集計し、「第一理由」回答数に「3点」、「第二理由」回答数に「2点」、「第三理由」回答数に「1点」をかけた上で合計し、その合計点の上位3位。

第一理由	第二理由	第三理由
4	6	7

【2】本学の授業に関する以下の項目について、該当する数字をそれぞれ一つ選んでマークしてください。

質問内容	回答内容(点数)					回答者計	平均値
	はい 5	まあそうである 4	どちらとも言えない 3	あまりそうとは言えない 2	いいえ 1		
(1) 興味をもてる授業が多い	24	36	12	2	1	75	4.07
(2) ためになる授業が多い	29	36	9	1	0	75	4.24
(3) わかりやすい授業が多い	13	34	24	3	1	75	3.73
(4) 主体的に考え行動する授業が多い	13	38	24	0	0	75	3.85
(5) 就職に役立つ授業が多い	41	23	11	0	0	75	4.40
(6) 国際性を培うことができる授業が多い	6	13	28	22	6	75	2.88
(7) 授業が良くなるよう工夫をしている教員が多い	17	33	22	2	1	75	3.84
(8) 授業や学生指導に対して熱心な教員が多い	24	32	14	4	1	75	3.99

【3】授業を受けて、あなたは下記の知識や能力を身につけることができましたか。該当する数字をそれぞれ一つ選んでマークしてください。

質問内容	回答内容(点数)					回答者計	平均値
	はい 5	まあそうである 4	どちらとも言えない 3	あまりそうとは言えない 2	いいえ 1		
(1) 幅広い教養	22	36	16	1	0	75	4.05
(2) 専門知識や技能	33	33	9	0	0	75	4.32
(3) 課題解決能力(課題を発見し、解決する力)	13	38	22	2	0	75	3.83
(4) 物事を批判的に捉え思考する力	7	31	32	5	0	75	3.53
(5) 情報機器を使いこなす能力	6	12	40	9	7	74	3.01
(6) 外国語を運用する能力	4	16	26	24	5	75	2.87
(7) コミュニケーション能力(議論・発表・協働する力)	15	28	25	6	1	75	3.67
(8) リーダーシップをとる力	6	20	37	10	2	75	3.24

【4】本学の改善に向けて今後取り組むべき事項について、該当する数字をそれぞれ一つ選んでマークしてください。

質問内容	回答内容(点数)					回答者計	平均値
	はい 5	まあそうである 4	どちらとも言えない 3	あまりそうとは言えない 2	いいえ 1		
(1) カリキュラムを改善する	7	23	24	10	10	74	3.09
(2) 教員の授業力を向上する	6	19	31	9	9	74	3.05
(3) コミュニケーション能力の向上を重視した教育を充実する	7	28	27	5	6	73	3.34
(4) 学習相談等、学習を支援する体制を充実する	11	24	25	9	5	74	3.36
(5) 学生生活を支援する体制を充実する	18	22	25	5	5	75	3.57
(6) 就職に役立つ授業を充実する	19	23	24	2	6	74	3.64
(7) 地域社会との関わりを重視する	10	21	31	7	5	74	3.32
(8) 施設や設備を充実する	27	19	18	5	4	73	3.82

【5】この一年間において、授業の予習・復習時間は1日につき平均何時間ですか。該当する数字を一つ選んでマークしてください。

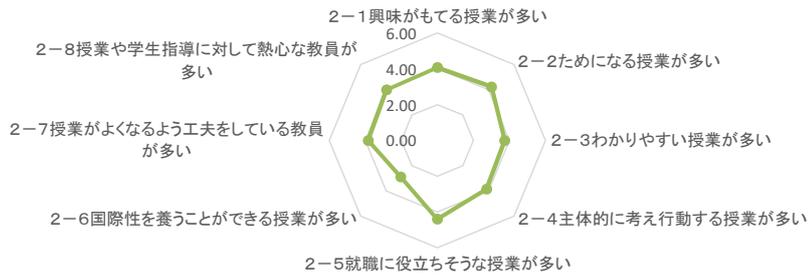
回答内容(点数)	3時間以上	2時間以上 3時間未満	1時間以上 2時間未満	30分以上 1時間未満	30分未満	回答者計	平均値
	5	4	3	2	1		
	3	3	13	22	34	75	1.92

【6】あなたは、本学に入学して良かったと思いますか。該当する数字を一つ選んでマークしてください。

回答内容(点数)	はい	まあそうである	どちらとも言えない	あまりそうとは言えない	いいえ	回答者計	平均値
	5	4	3	2	1		
	42	19	8	5	1	75	4.28

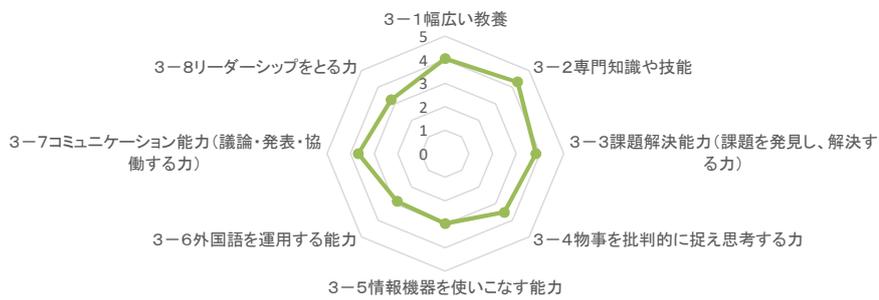
【2】授業について

● 1学部



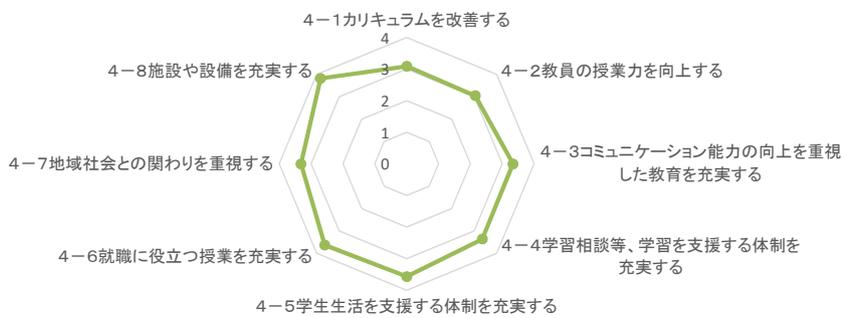
【3】授業を受けて身についた知識・能力について

● 1学部



【4】改善に向けて取り組むべき事項について

● 1学部



学習成果等アンケート集計結果(幼児教育科2年次)

1学部

平成30年12月実施

【1】あなたが本学への入学を決定された理由を強い順に3つ下記から選んでマークしてください。

	第一理由	第二理由	第三理由
1. 建学の理念に共感したから	2	0	0
2. 入試科目があっていたから	1	1	0
3. 自分の学力にあっていたから	1	2	4
4. 学びたい学部・学科・コースがあったから	24	20	13
5. カリキュラムが充実しているから	3	3	9
6. 資格を取得出来るから	32	22	11
7. 就職に役立つから	2	12	12
8. キャンパスの施設・設備が良いから	1	4	3
9. 地元の大学だから	6	11	13
10. 大学の知名度が高かったから	0	1	0
11. 大学が設置されている地域に魅力があるから	0	0	0
12. 学費が安いから	0	0	0
13. 親や教員に勧められたから	5	2	11
14. 本学しか合格しなかったから	0	0	1
15. その他	2	1	2

「第一理由」「第二理由」「第三理由」それぞれの回答数を集計し、「第一理由」回答数に「3点」、「第二理由」回答数に「2点」、「第三理由」回答数に「1点」をかけた上で合計し、その合計点の上位3位。

第一理由	第二理由	第三理由
6	4	9

【2】本学の授業に関する以下の項目について、該当する数字をそれぞれ一つ選んでマークしてください。

質問内容	回答内容(点数)					回答者計	平均値
	はい 5	まあそうである 4	どちらとも言えない 3	あまりそうとは言えない 2	いいえ 1		
(1) 興味をもてる授業が多い	21	43	14	1	0	79	4.06
(2) ためになる授業が多い	35	37	6	1	0	79	4.34
(3) わかりやすい授業が多い	14	41	19	5	0	79	3.81
(4) 主体的に考え行動する授業が多い	11	39	24	5	0	79	3.71
(5) 就職に役立つ授業が多い	44	27	6	2	0	79	4.43
(6) 国際性を培うことができる授業が多い	4	8	36	20	9	77	2.71
(7) 授業が良くなるよう工夫をしている教員が多い	13	36	22	7	0	78	3.71
(8) 授業や学生指導に対して熱心な教員が多い	27	37	11	4	0	79	4.10

【3】授業を受けて、あなたは下記の知識や能力を身につけることができましたか。該当する数字をそれぞれ一つ選んでマークしてください。

質問内容	回答内容(点数)					回答者計	平均値
	はい 5	まあそうである 4	どちらとも言えない 3	あまりそうとは言えない 2	いいえ 1		
(1) 幅広い教養	23	44	11	0	1	79	4.11
(2) 専門知識や技能	30	46	3	0	0	79	4.34
(3) 課題解決能力(課題を発見し、解決する力)	14	32	31	2	0	79	3.73
(4) 物事を批判的に捉え思考する力	8	32	32	6	1	79	3.51
(5) 情報機器を使いこなす能力	10	33	28	7	1	79	3.56
(6) 外国語を運用する能力	3	5	33	25	13	79	2.49
(7) コミュニケーション能力(議論・発表・協働する力)	17	38	19	5	0	79	3.85
(8) リーダーシップをとる力	6	29	31	10	3	79	3.32

【4】本学の改善に向けて今後取り組むべき事項について、該当する数字をそれぞれ一つ選んでマークしてください。

質問内容	回答内容(点数)					回答者計	平均値
	はい 5	まあそうである 4	どちらとも言えない 3	あまりそうとは言えない 2	いいえ 1		
(1) カリキュラムを改善する	4	16	38	12	9	79	2.92
(2) 教員の授業力を向上する	6	20	36	13	4	79	3.14
(3) コミュニケーション能力の向上を重視した教育を充実する	6	28	34	7	4	79	3.32
(4) 学習相談等、学習を支援する体制を充実する	8	23	35	9	4	79	3.28
(5) 学生生活を支援する体制を充実する	6	35	25	9	4	79	3.38
(6) 就職に役立つ授業を充実する	11	24	29	12	3	79	3.35
(7) 地域社会との関わりを重視する	5	28	34	8	3	78	3.31
(8) 施設や設備を充実する	17	29	21	6	6	79	3.57

【5】この一年間において、授業の予習・復習時間は1日につき平均何時間ですか。該当する数字を一つ選んでマークしてください。

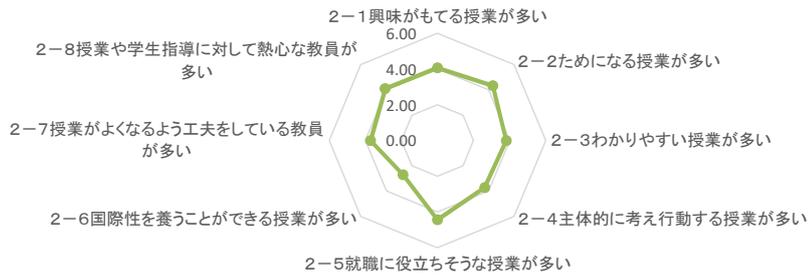
回答内容(点数)	3時間以上	2時間以上 3時間未満	1時間以上 2時間未満	30分以上 1時間未満	30分未満	回答者計	平均値
	5	4	3	2	1		
	0	2	7	23	47	79	1.54

【6】あなたは、本学に入学して良かったと思いますか。該当する数字を一つ選んでマークしてください。

回答内容(点数)	はい	まあそうである	どちらとも言えない	あまりそうとは言えない	いいえ	回答者計	平均値
	5	4	3	2	1		
	53	19	5	2	0	79	4.56

【2】授業について

● 1学部



【3】授業を受けて身についた知識・能力について

● 1学部



【4】改善に向けて取り組むべき事項について

● 1学部



学習成果等アンケート集計結果(専攻科福祉専攻)

2学部

平成26年12月実施

【1】あなたが本学への入学を決定された理由を強い順に3つ下記から選んでマークしてください。

	第一理由	第二理由	第三理由
1. 建学の理念に共感したから	0	0	1
2. 入試科目があっていたから	0	0	0
3. 自分の学力にあっていたから	0	0	0
4. 学びたい学部・学科・コースがあったから	11	3	3
5. カリキュラムが充実しているから	0	1	2
6. 資格を取得出来るから	4	11	3
7. 就職に役立つから	2	2	4
8. キャンパスの施設・設備が良いから	0	0	0
9. 地元の大学だから	1	3	3
10. 大学の知名度が高かったから	0	0	0
11. 大学が設置されている地域に魅力があるから	0	0	3
12. 学費が安いから	0	0	0
13. 親や教員に勧められたから	1	1	2
14. 本学しか合格しなかったから	1	0	0
15. その他	1	0	0

「第一理由」「第二理由」「第三理由」それぞれの回答数を集計し、「第一理由」回答数に「3点」、「第二理由」回答数に「2点」、「第三理由」回答数に「1点」をかけた上で合計し、その合計点の上位3位。

第一理由	第二理由	第三理由
4	6	7

【2】本学の授業に関する以下の項目について、該当する数字をそれぞれ一つ選んでマークしてください。

質問内容	回答内容(点数)					回答者計	平均値
	はい 5	まあそうである 4	どちらとも言えない 3	あまりそうとは言えない 2	いいえ 1		
(1) 興味もてる授業が多い	7	13	0	0	1	21	4.19
(2) ためになる授業が多い	12	9	0	0	0	21	4.57
(3) わかりやすい授業が多い	3	11	7	0	0	21	3.81
(4) 主体的に考え行動する授業が多い	5	13	2	1	0	21	4.05
(5) 就職に役立つ授業が多い	14	6	1	0	0	21	4.62
(6) 国際性を培うことができる授業が多い	2	5	8	5	1	21	3.10
(7) 授業が良くなるよう工夫をしている教員が多い	5	11	4	1	0	21	3.95
(8) 授業や学生指導に対して熱心な教員が多い	8	8	5	0	0	21	4.14

【3】授業を受けて、あなたは下記の知識や能力を身につけることができましたか。該当する数字をそれぞれ一つ選んでマークしてください。

質問内容	回答内容(点数)					回答者計	平均値
	はい 5	まあそうである 4	どちらとも言えない 3	あまりそうとは言えない 2	いいえ 1		
(1) 幅広い教養	7	12	1	1	0	21	4.19
(2) 専門知識や技能	11	10	0	0	0	21	4.52
(3) 課題解決能力(課題を発見し、解決する力)	5	12	4	0	0	21	4.05
(4) 物事を批判的に捉え思考する力	3	13	2	2	0	20	3.85
(5) 情報機器を使いこなす能力	5	9	4	3	0	21	3.76
(6) 外国語を運用する能力	2	8	6	4	1	21	3.29
(7) コミュニケーション能力(議論・発表・協働する力)	5	12	3	1	0	21	4.00
(8) リーダーシップをとる力	2	9	8	2	0	21	3.52

【4】本学の改善に向けて今後取り組むべき事項について、該当する数字をそれぞれ一つ選んでマークしてください。

質問内容	回答内容(点数)					回答者計	平均値
	はい 5	まあそうである 4	どちらとも言えない 3	あまりそうとは言えない 2	いいえ 1		
(1) カリキュラムを改善する	3	3	10	1	4	21	3.00
(2) 教員の授業力を向上する	1	5	10	3	2	21	3.00
(3) コミュニケーション能力の向上を重視した教育を充実する	3	10	6	2	0	21	3.67
(4) 学習相談等、学習を支援する体制を充実する	4	5	8	4	0	21	3.43
(5) 学生生活を支援する体制を充実する	5	7	8	1	0	21	3.76
(6) 就職に役立つ授業を充実する	4	6	7	2	2	21	3.38
(7) 地域社会との関わりを重視する	3	7	10	1	0	21	3.57
(8) 施設や設備を充実する	10	3	5	3	0	21	3.95

【5】この一年間において、授業の予習・復習時間は1日につき平均何時間ですか。該当する数字を一つ選んでマークしてください。

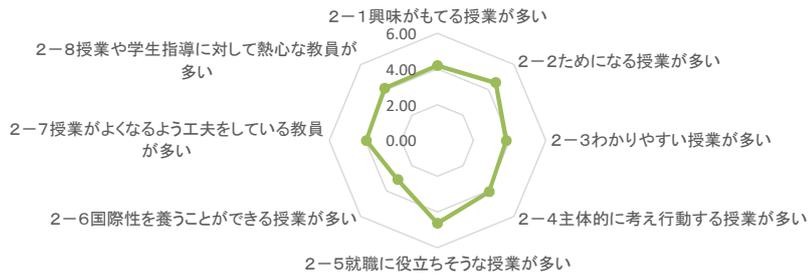
回答内容(点数)	3時間以上 5	2時間以上 3時間未満 4	1時間以上 2時間未満 3	30分以上 1時間未満 2	30分未満 1	回答者計	平均値
		1	3	11	4		

【6】あなたは、本学に入学して良かったと思いますか。該当する数字を一つ選んでマークしてください。

回答内容(点数)	はい 5	まあそうである 4	どちらとも言えない 3	あまりそうとは言えない 2	いいえ 1	回答者計	平均値
		14	6	0	0		

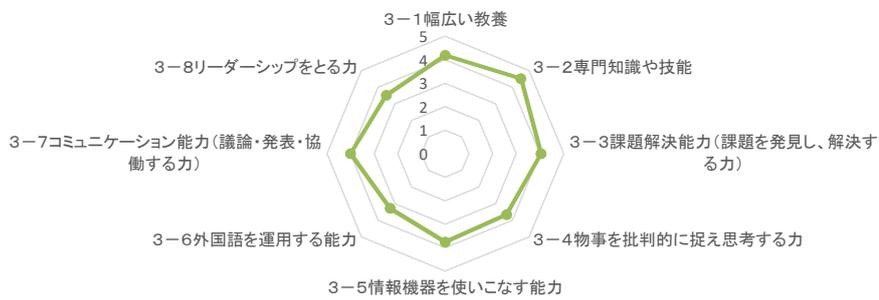
【2】授業について

2学部



【3】授業を受けて身についた知識・能力について

2学部



【4】改善に向けて取り組むべき事項について

2学部



羽陽学園短期大学 授業改善アンケート集計結果(平成30年度前期)

授業科目名	履修者数	回答数	回答率	動機1	動機2	動機3	意欲平均	理解平均	向上平均	自発的平均	探求平均	熱意平均	教え方平均	コミュニケーション平均	勉強時間平均(%)					板書平均	環境平均	オプション	総合平均	
															3時間以上	2~3時間	1~2時間	30分~1時間	30分未満					
基礎教養入門	86	81	94.20	6	5	4	4.1	4.1	4.0	3.9	3.9	4.2	4.0	3.9	3.9	1.3	3.8	7.5	6.3	81.3	4.1	4.2	3.8	4.3
倫理学	13	9	69.20	6	5	1	4.1	4.0	4.0	3.8	3.7	4.4	3.9	3.7	11.1	0.0	0.0	22.2	66.7	3.9	3.9		3.9	
文学	73	65	89.00	6	5	4	4.1	4.0	4.0	3.8	3.7	4.2	4.0	3.7	3.1	1.6	10.9	10.9	73.4	3.9	4.1	3.5	4.1	
音楽基礎A	86	79	91.90	6	4	5	4.5	4.4	4.3	4.2	4.1	4.6	4.4	4.4	6.6	7.9	26.3	28.9	30.3	4.1	4.3	3.7	4.6	
音楽基礎B	86	82	95.30	6	4	5	4.8	4.8	4.5	4.6	4.5	4.7	4.7	4.7	19.8	24.7	25.9	24.7	4.9	4.4	4.7	4.0	4.8	
図画工作	86	80	93.00	6	4	4	4.6	4.5	4.3	4.5	4.1	4.5	4.6	4.5	6.3	1.3	10.1	15.2	67.1	4.3	4.5	4.4	4.7	
幼児教育者論	86	80	93.00	6	5	4	4.5	4.2	4.2	4.1	4.0	4.7	4.6	4.4	5.0	2.5	11.3	12.5	68.8	4.4	4.5	4.0	4.6	
教育原理	86	79	91.90	6	4	5	4.5	4.1	4.1	4.0	3.7	4.7	4.5	4.2	3.9	0.0	7.8	19.5	68.8	4.3	4.5	4.2	4.6	
視聴覚教育論	86	78	90.70	6	5	4	4.4	4.3	4.3	4.2	4.2	4.3	4.1	4.0	7.8	3.9	7.8	9.1	71.4	4.0	4.3	3.5	4.3	
教育実習指導	86	81	94.20	6	4	1	4.3	4.3	4.1	4.0	3.6	4.5	4.3	3.8	2.5	0.0	15.0	7.5	75.0	4.3	4.3	4.3	4.5	
保育原理	86	76	88.40	6	4	4	4.4	4.2	4.1	4.0	3.7	4.5	4.5	4.2	2.7	2.7	2.7	18.9	73.0	4.4	4.5	5.0	4.7	
社会福祉概論	86	80	93.00	6	5	4	4.2	4.0	4.0	4.0	3.9	4.1	4.1	3.9	1.3	6.3	16.3	11.3	65.0	4.1	4.3	3.4	4.4	
社会的養護	86	81	94.20	6	5	4	4.1	3.9	3.9	3.9	3.9	4.1	3.8	4.0	2.5	6.3	10.0	13.8	67.5	3.9	4.1	4.0	4.3	
子どもの食と栄養A	86	79	91.90	6	4	4	4.6	4.4	4.3	4.3	4.2	4.7	4.6	4.4	3.9	2.6	18.2	29.9	45.5	4.3	4.5	4.0	4.7	
子どもの食と栄養B	40	38	95.00	6	4, 5		4.6	4.7	4.6	4.5	4.3	4.9	4.8	4.8	2.6	0.0	15.8	44.7	36.8	4.5	4.8		4.9	
乳児保育	86	76	88.40	6	4	5	3.3	2.9	3.1	3.0	2.9	3.2	2.6	2.5	0.0	4.0	13.3	12.0	70.7	3.1	3.2	3.5	3.0	
児童文化	86	79	91.90	6	4	4	4.5	4.4	4.3	4.2	4.0	4.4	4.5	4.5	3.8	2.6	15.4	19.2	59.0	4.2	4.5	3.3	4.6	
子どもの生活と福祉	13	12	92.30	1	4, 5		4.3	4.3	4.2	4.1	4.2	4.7	4.4	4.7	8.3	8.3	0.0	16.7	66.7	4.8	4.6		4.8	
日本国憲法	99	97	98.00	6	5	4	3.3	2.6	2.8	2.7	2.7	4.1	2.6	2.7	2.1	3.2	2.1	4.2	88.4	3.1	3.8	2.7	3.1	
こどもと音楽B	99	93	93.90	6	5	4	4.6	4.6	4.6	4.5	4.4	4.7	4.6	4.6	4.4	8.8	31.9	41.8	13.2	4.4	4.6	5.0	4.7	
こどもと音楽C	95	89	93.70	6	5	4	4.3	4.4	4.3	4.2	4.2	4.6	4.4	4.4	4.7	4.7	5.9	2.4	82.4	4.1	4.5	4.7	4.5	
国語表現法	6	6	100.00	3, 5	4	8	4.7	4.7	4.7	4.7	4.7	4.7	4.8	4.3	0.0	0.0	0.0	0.0	100.0	4.7	4.8		4.7	
保育内容研究・健康	99	89	89.90	6	5	4	4.0	3.9	3.8	3.6	3.5	4.2	3.9	3.6	3.4	3.4	3.4	5.7	83.9	3.9	4.1	4.0	4.0	
保育内容研究・人間関係	99	90	90.90	6	5	4	4.4	4.3	4.2	4.2	4.0	4.6	4.5	4.3	1.1	4.5	4.5	2.3	87.5	4.5	4.6	5.0	4.5	
保育内容研究・言葉	99	94	94.90	6	5	4	4.1	4.1	4.0	3.9	3.7	4.4	4.1	4.0	1.1	5.4	5.4	4.3	83.9	4.1	4.4	4.0	4.3	
保育内容研究・表現	99	93	93.90	6	5	4	4.3	4.3	4.2	4.2	4.1	4.5	4.3	4.5	4.4	5.5	4.4	13.2	72.5	4.3	4.3	4.7	4.4	
子どもの生活と文化Ⅱ	97	84	86.60	6	5	4	4.5	4.4	4.3	4.3	4.3	4.6	4.4	4.4	4.8	6.0	8.4	8.4	72.3	4.3	4.5	5.0	4.5	
臨床心理学	99	83	83.80	6	5	4	3.8	3.5	3.5	3.3	3.3	4.0	3.3	3.3	2.4	3.6	2.4	7.2	84.3	3.5	3.9	4.5	3.5	
相談援助	99	96	97.00	6	5	4	4.2	4.0	4.0	3.9	3.8	4.3	4.2	4.3	3.2	4.3	3.2	6.4	83.0	4.2	4.5	5.0	4.3	
保育内容総論	99	98	99.00	6	5	4	4.3	4.2	4.2	4.1	4.0	4.3	4.3	4.3	3.1	3.1	5.2	6.2	82.5	4.2	4.4	4.8	4.4	
社会的養護内容	99	88	88.90	6	5	4	4.3	4.2	4.1	4.1	4.0	4.3	4.3	4.2	4.6	3.4	4.6	3.4	83.9	4.4	4.5	4.2	4.5	
保育実践研究Ⅲ	79	78	98.70	1	5	4	4.4	4.6	4.4	4.3	4.2	4.6	4.4	4.6	5.3	5.3	5.3	1.3	82.9	4.2	4.4	4.3	4.7	
介護福祉総論Ⅱ	24	22	91.70	5	3, 1, 4		4.7	4.8	4.8	4.7	4.7	4.9	4.9	4.9	4.5	0.0	9.1	18.2	68.2	4.6	4.8		4.9	
介護保険制度と障害者自立支援制度	21	21	100.00	6, 4, 5	4		4.3	4.0	4.2	4.1	4.0	4.0	4.1	4.1	5.0	5.0	15.0	20.0	55.0	4.3	4.5		4.5	
介護の基本Ⅱ	21	21	100.00	6	5	4	4.4	4.2	4.3	4.2	4.3	4.3	4.3	4.3	4.8	9.5	0.0	23.8	61.9	4.4	4.4	4.0	4.5	
介護の基本Ⅲ	21	21	100.00	6	5	4	4.6	4.4	4.6	4.5	4.4	4.7	4.7	4.7	4.8	9.5	9.5	14.3	61.9	4.5	4.5		4.7	
コミュニケーション技術Ⅰ	21	21	100.00	6	4	4	4.0	4.0	4.2	3.9	4.0	4.3	4.0	4.0	0.0	9.5	0.0	23.8	66.7	4.0	4.2	4.0	4.1	
生活支援技術Ⅰ	21	21	100.00	6	5	4	4.5	4.3	4.4	4.4	4.3	4.5	4.4	4.5	0.0	9.5	14.3	38.1	38.1	4.4	4.4		4.4	
生活支援技術Ⅱ	21	21	100.00	6, 4, 5	4, 5		4.1	4.1	4.1	4.0	4.1	4.3	4.0	4.2	9.5	4.8	4.8	14.3	66.7	4.1	4.3		4.2	
生活支援技術Ⅲ	21	21	100.00	6, 4, 5	4		4.2	4.3	4.3	4.2	4.0	4.5	4.3	4.2	0.0	9.5	0.0	28.6	61.9	4.2	4.3	4.0	4.4	
生活支援技術Ⅳ	21	21	100.00	6	4	5	4.3	4.3	4.4	4.3	4.1	4.8	4.5	4.7	0.0	0.0	4.8	28.6	66.7	4.2	4.3		4.6	
介護過程Ⅰ	21	21	100.00	6	4, 5		4.4	4.2	4.4	4.4	4.4	4.5	4.3	4.3	0.0	9.5	23.8	19.0	47.6	4.4	4.4	5.0	4.4	
介護過程Ⅱ	21	21	100.00	6	4	5	4.6	4.5	4.6	4.5	4.5	4.8	4.7	4.6	4.8	4.8	9.5	28.6	52.4	4.5	4.6		4.5	
介護総合演習Ⅰ	21	21	100.00	6	5	4	4.4	4.3	4.5	4.3	4.3	4.5	4.4	4.4	4.8	4.8	9.5	9.5	71.4	4.3	4.5		4.4	
発達と老化の理解	21	21	100.00	6	5	4	4.3	4.2	4.5	4.4	4.4	4.5	4.4	4.5	0.0	9.5	19.0	28.6	42.9	4.3	4.4		4.4	
こことからだⅠ	21	21	100.00	6	5	4	4.4	4.2	4.4	4.3	4.3	4.5	4.4	4.4	0.0	9.5	19.0	28.6	42.9	4.4	4.4		4.4	
社会福祉演習	21	21	100.00	6	5	4	4.4	4.4	4.4	4.4	4.5	4.5	4.4	4.4	0.0	9.5	14.3	19.0	57.1	4.4	4.4		4.5	
医療的ケアⅠ	21	21	100.00	6	5	4	4.4	4.3	4.4	4.4	4.3	4.5	4.3	4.4	0.0	14.3	14.3	23.8	47.6	4.4	4.5		4.5	

羽陽学園短期大学 授業改善アンケート集計結果(平成30年度後期)

授業科目名	履修者数	回答数	回答率	動機1	動機2	動機3	意欲平均	理解平均	向上平均	自発的平均	探求平均	熱意平均	教え方平均	コミュニケーション平均	勉強時間平均(%)					板書平均	環境平均	オプション	総合平均	
															3時間以上	2~3時間	1~2時間	30分~1時間	30分未満					
総合科目	48	44	91.70	6	5	4	4.1	3.8	3.8	3.8	3.8	4.2	3.9	3.7	3.7	9.3	2.3	9.3	7.0	72.1	3.9	4.2	4.7	4.1
経済学	28	24	85.70	6	5	4	4.0	3.9	3.8	3.7	3.7	4.2	4.0	3.4	0.0	0.0	29.2	0.0	70.8	3.8	4.0	4.0	4.2	
英語コミュニケーション	83	71	85.50	6	5	4	4.1	4.1	3.9	3.9	3.8	4.5	4.3	4.4	2.8	1.4	8.5	11.3	76.1	4.1	4.4	3.0	4.4	
体育実技	83	78	94.00	6	5	4	4.5	4.6	4.4	4.4	4.2	4.6	4.6	4.3	2.6	3.8	5.1	6.4	82.1	4.2	4.3	4.4	4.6	
体育講義	83	78	94.00	6	5	4	4.2	4.1	4.1	4.0	3.8	4.2	4.2	3.9	3.9	3.9	6.5	5.2	80.5	4.1	4.2	3.9	4.2	
子どもと音楽A	83	68	81.90	6	5	4	4.4	4.3	4.2	4.2	4.1	4.5	4.3	4.4	6.0	1.5	7.5	10.4	74.6	4.1	4.4	4.0	4.5	
図画工作	83	75	90.40	6	5	4	4.5	4.4	4.4	4.4	4.3	4.5	4.6	4.6	9.5	2.7	8.1	9.5	70.3	4.4	4.5	4.0	4.7	
指導法の研究	83	75	90.40	6	5	4	4.3	4.2	4.2	4.1	4.1	4.7	4.5	4.3	5.3	4.0	12.0	8.0	70.7	4.4	4.5	3.8	4.6	
教育心理学	83	74	89.20	6	5	4	4.4	4.1	4.1	4.1	3.9	4.8	4.5	4.2	2.7	2.7	9.5	6.8	78.4	4.5	4.5	4.3	4.5	
発達心理学	83	76	91.60	6	4	4	4.3	4.1	4.1	4.1	3.8	4.6	4.6	4.2	5.3	2.6	10.5	7.9	73.7	4.4	4.5	4.1	4.5	
学級経営論	83	76	91.60	6	5	4	4.0	3.8	3.7	3.7	3.7	4.0	3.7	3.8	3.9	2.6	10.5	2.6	80.3	4.0	4.1	3.8	4.0	
保育・教育課程論	83	73	88.00	6	5	4	4.2	4.2	4.1	4.0	4.0	4.4	4.2	4.2	5.5	2.7	8.2	5.5	78.1	4.3	4.3	4.3	4.4	
保育内容研究(環境)	83	74	89.20	6	5	4	4.3	4.3	4.2	4.2	4.0	4.6	4.5	4.3	6.8	2.7	8.2	11.0	71.2	4.3	4.4	4.3	4.5	
児童家庭福祉	83	76	91.60	6	5	4	4.1	4.0	4.0	4.0	3.9	4.1	3.9	3.9	6.7	8.0	13.3	6.7	65.3	3.9	4.0	3.6	4.2	
子どもの保健Ⅰ	83	61	73.50	6	5	4	4.4	4.3	4.3	4.2	4.2	4.6	4.5	4.3	11.5	3.3	8.2	1.6	75.4	4.5	4.5	4.3	4.6	
子どもの保健Ⅱ	83	73	88.00	6	5	4	3.5	3.4	3.4	3.3	3.4	3.6	3.2	3.2	1.4	1.4	6.9	6.9	83.3	3.5	3.4	3.8	3.4	
子どもの食と栄養B	44	38	86.40	6	5	4	4.6	4.5	4.6	4.5	4.3	4.7	4.7	4.6	10.8	5.4	8.1	16.2	59.5	4.4	4.6	4.3	4.7	
介護技術演習	8	7	87.50	1	3	4, 5	4.6	4.6	4.4	4.6	4.6	4.9	4.9	5.0	28.6	0.0	0.0	0.0	71.4	4.6	5.0		5.0	
介護福祉総論Ⅰ	7	6	85.70	6	5, 3, 4		4.7	4.3	4.3	4.5	4.5	4.5	4.7	4.7	0.0	16.7	0.0	0.0	83.3	4.8	4.7		4.7	
保育実習指導Ⅰ	83	78	94.00	6	5	4	4.4	4.3	4.3	4.2	4.2	4.3	4.3	4.1	3.9	10.4	11.7	5.2	68.8	4.2	4.3	3.7	4.4	
図画工作Ⅱ	40	39	97.50	1	4, 5		4.6	4.7	4.5	4.4	4.4	4.5	4.6	4.6	5.4	0.0	10.8	5.4	78.4	4.5	4.6		4.7	
体育	99	95	96.00	6	5	4	4.2	4.3	4.1	4.1	4.0	4.4	4.2	4.3	1.1	11.6	3.2	8.4	75.8	4.1	4.1	3.6	4.3	
子どもの生活と文化Ⅰ	71	68	95.80	6	5	4	4.1	4.1	4.1	4.0	4.0	4.2	4.1	4.0	4.4	7.4	8.8	2.9	76.5	4.2	4.2	3.8	4.2	
子どもの生活と文化Ⅲ	5	5	100.00	1, 5		5, 3, 4, 7, 8	3.4	3.6	3.0	3.2	2.8	3.8	3.4	3.4	0.0	0.0	20.0	0.0	80.0	3.3	3.6		3.0	
保育・教職実践演習(幼稚園)	99	90	90.90	6	5	4	4.2	4.1	4.1	4.0	4.0	4.2	4.1	4.0	1.1	5.6	6.7	3.3	83.3	4.1	4.2	2.5	4.1	
保育実践研究Ⅰ	81	74	91.40	6	5	4	4.2	4.2	4.1	4.0	3.9	4.5	4.3	3.9	1.4	8.5	7.0	5.6	77.5	4.1	4.3	3.9	4.3	
保育実践研究Ⅱ	13	10	76.90	6	5	4	4.5	4.5	4.4	4.1	4.3	4.8	4.4	4.7	0.0	0.0	10.0	0.0	90.0	4.4	4.7		4.7	
情報処理演習	99	92	92.90	6	5	4	4.1	4.1	4.0	3.8	3.7	4.1	3.8	3.7	1.1	3.3	7.7	3.3	84.6	3.9	4.1	3.5	4.1	
保育原理Ⅱ	7	6	85.70	1, 5		4	4.0	4.0	4.0	3.8	3.5	4.3	3.8	4.0	0.0	0.0	16.7	16.7	66.7	3.8	3.7	4.0	4.2	
子どもの保健Ⅲ	82	59	72.00	6	5	4	4.4	4.3	4.3	4.2	4.2	4.5	4.4	4.1	1.7	1.7	6.9	6.9	82.8	4.3	4.5	4.2	4.4	
障害児保育	99	95	96.00	6	5	4	4.4	4.3	4.3	4.2	4.0	4.7	4.3	4.4	2.2	3.2	7.5	4.3	82.8	4.3	4.5	4.0	4.5	
家庭支援論	99	93	93.90	6	5	4	4.3	4.3	4.2	4.2	4.1	4.3	4.3	4.2	4.3	9.7	6.5	2.2	77.4	4.3	4.4	4.2	4.4	
保育相談支援	99	99	100.00	6	5	4	4.1	4.1	4.1	4.0	4.0	4.2	4.1	4.2	2.1	8.2	8.2	1.0	80.4	4.2	4.3	3.7	4.2	
保育実習指導Ⅱ	99	80	80.80	6	5	4	4.2	4.2	4.2	3.9	3.9	4.2	4.0	3.8	3.8	3.8	6.3	3.8	82.5	4.0	4.2	3.9	4.2	
保育実習指導Ⅲ	1	1	100.00	4	5	1	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	4.0	5.0	5.0	0.0	0.0	100.0	0.0	0.0	5.0	5.0		5.0	
介護の基本Ⅰ	21	21	100.00	6	5	4	4.3	4.0	4.3	4.1	4.1	4.1	4.0	4.0	4.8	14.3	28.6	19.0	33.3	4.0	4.1		4.3	
介護の基本Ⅳ	21	21	100.00	6	5	4	4.4	4.1	4.3	4.1	4.2	4.3	4.2	4.2	4.8	19.0	33.3	14.3	28.6	4.1	4.2		4.3	
介護の基本Ⅴ	21	21	100.00	6	5	4	4.6	4.8	4.7	4.6	4.5	4.9	4.7	4.8	4.8	14.3	9.5	19.0	52.4	4.9	4.7		4.8	
コミュニケーション技術Ⅱ	21	21	100.00	6	5	4	4.0	4.0	4.0	4.0	4.0	4.0	3.9	3.9	4.8	23.8	9.5	23.8	38.1	4.0	4.1		4.1	
生活支援技術Ⅴ	21	21	100.00	6	5	4	4.1	4.2	4.0	4.0	4.0	4.1	4.2	4.1	9.5	14.3	28.6	14.3	33.3	4.2	4.2	1.0	4.2	
生活支援技術Ⅵ	21	21	100.00	6	5	4	4.5	4.4	4.5	4.5	4.2	4.5	4.4	4.6	4.8	14.3	14.3	28.6	38.1	4.4	4.4		4.5	
生活支援技術Ⅶ	21	20	95.20	6	5	4	4.6	4.5	4.7	4.7	4.6	4.9	4.6	4.8	10.5	15.8	10.5	15.8	47.4	4.6	4.8		4.8	
介護過程Ⅲ	21	21	100.00	6	5	4	4.2	4.0	4.0	4.0	4.1	4.0	3.9	4.0	9.5	19.0	23.8	14.3	33.3	4.0	4.0		4.1	
介護総合演習Ⅱ	21	21	100.00	6	5	4	4.3	4.2	4.2	4.0	4.1	4.2	4.0	4.0	4.8	28.6	19.0	19.0	28.6	4.2	4.2		4.2	
認知症の理解	21	21	100.00	6	5	4	4.2	4.2	4.2	4.3	4.0	4.3	4.3	4.2	9.5	14.3	28.6	19.0	28.6	4.2	4.3		4.4	
障害の理解	21	21	100.00	6	5	4	4.5	4.3	4.5	4.3	4.2	4.4	4.4	4.4	4.8	9.5	23.8	19.0	42.9	4.6	4.6		4.5	
こころからだⅡ	21	21	100.00	6	5	4	4.2	4.1	4.1	4.2	4.0	4.2	4.1	4.3	9.5	19.0	19.0	19.0	33.3	4.1	4.3	4.0	4.3	
社会福祉演習	21	21	100.00	6	5	4	4.4	4.5	4.4	4.2	4.5	4.5	4.4	4.4	4.8	14.3	23.8	14.3	42.9	4.4	4.4		4.4	
医療的ケアⅡ	21	21	100.00	6	5	4	4.1	4.1	4.1	4.1	4.1	4.2	4.2	4.1	9.5	19.0	14.3	19.0	38.1	4.1	4.1		4.3	